



Title	歴史を踏まえ、この先に生きる社会心理学研究の展開 を目指すためになにをなすべきか
Author(s)	山口, 勸; 小口, 孝司; 三浦, 麻子 他
Citation	対人社会心理学研究. 2010, 10, p. 1-32
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/9681">https://doi.org/10.18910/9681</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 歴史を踏まえ、この先に生きる社会心理学研究の展開を目指すために なにをなすべきか

山口 勸(東京大学大学院人文社会系研究科)  
小口孝司(立教大学現代心理学部)  
三浦麻子(関西学院大学文学部)  
永田良昭(学習院大学[名誉教授])  
吉田寿夫(関西学院大学社会学部)  
大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

社会心理学は、われわれが生活する社会的な環境に含まれているほぼすべての要因とかかわる総合的な科学である。基礎的な要因の把握を踏まえながら、現実生活の出来事に働く法則性を説明し、背景にある原理を探り、生活の実践的な工夫を促し、適応的に行動する方法を人びとに提供する。目指される目標は他者との適応的な関係を築くことであり、相互協調的な社会を築くこと well-being。こそが、心がけられなければならない。日々の生活シーンは、それぞれに研究の興味を誘うものである。そのために、社会心理学の研究はえてして、断片的な、一時的な現象を列挙するだけに終始しがちなこともあるが、時間的展望をもった上での長く持続する社会を支える研究の展開こそが求められよう。

社会心理学の研究動向を踏まえ、社会心理学は社会にどのように活かされてきたのか(あるいは、社会の期待に応えられていなかったかも含め)、これから先を見通しながら、価値ある研究とは何か、われわれは何を求めていくべきかについて、考える必要がある。社会心理学は、これまでも関連諸科学の進展と結びつきながら変化してきている。安易に耳目を引くのではなく、どのような人間観、社会価値を踏まえているのかが研究として重要であろう。Reality があり、かつ、個人、社会の well-being を高めていくための研究展開の方法、課題を追究すべきである。

キーワード: well-being, 進化論、観光、地域振興、研究のコラボレーション、価値ある研究

### 企画の趣旨

大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

社会心理学だけに限らないのですが、研究のこれまでの流れを概観しますと、研究すること自体は、それなりに誰でもある手順で行うことができます。対象となる人を得(集め)て、調査・実験を行い、その結果を分析すればできるわけです。世には膨大な数の研究発表があります。学会大会での口頭発表、ポスター発表もありますし、社会的に承認された学術雑誌等に掲載される論文もあります。日本社会心理学会、日本グループ・ダイナミクス学会の両学会を含めて研究数は増大しております。しかし、多くの発表、研究はあるのですが、質はどうなのでしょう。研究の進展を勘案しても評価することが必要です。さまざまな形で学会の活動の中でも評価はなされているはずですが、評価のスピードを大幅に上回るほどの研究数があるのが現状ではないのでしょうか。

そして、そのような研究発表の中にどれだけわれわれが示唆を受けるものがあるのでしょうか。われわれ自身の感受性の問題もありますけれども、現状からすると、多くの研究が本当に評価に値するものかどうか、懸念せざるを得ないものがあると思っています。

実際に、極端な例になるかも知れませんが、耳目を集める研究は現在どれだけあるのでしょうか。例えば、Asch の非常にセンセーショナルな印象形成の研究、Zimbardo の監獄実験、それから Latané の援助行動など、われわれ社会心理学を研究している者の大方は、大なり小なりに、かなりインパクトのある研究としてこれらを受け取っており、影響を受けております。このような影響力のある、画期的な研究は今あるのでしょうか。このような現状を、われわれは反省を込めて考える必要があると思います。

研究というのは、公的活動であって趣味の活動ではありません。人に依頼して何かをしてもらう。回答してもらう。それを集めて分析をして、学会発表をする。この流れを振り返って見るならば、実施するという段階ですでにこれはもう社会的な行動です。参加をお願いしてこそ、その結果が得られますから、一人称ではないわけであり。そして、依頼して結果を得る訳ですから、そういうようなプロセスがあるならば、その成果は必ずアウトプットしなければいけない。そういう責任がわれわれ(研究者のみならず、学部生でも)にはあるわけです。

そのアウトプットというのは、単に大会や研究会、研究室での報告会での発表だけの場合もあるかもしれませんが、社会的にどれだけの貢献ができるかというフィードバックの機会が必要であるという意味です。

そして、研究とは、研究者と研究者が含まれる社会との相互作用なのであり、文化とか、それから社会的な規範などにわれわれは必ず暗黙であれ影響を受けているわけです。それを意識するしないかは研究者の問題であると言えます。そのことはその研究の含みもつ価値、humanityとして表れるでしょう。

さらに、研究活動には世代継承性(generativity)があると言えます。つまり、教員や先輩たちから受け継ぐものであり、受け継いだものは、また、後につなげていくという、われわれには当然の責任があるのです。自分勝手に、そのときの自分だけの思いのままに研究を行えばいいというものではないのです。先にある者は、自分の得てきたことを整理し、成果のみならず、研究姿勢、研究の社会的意味を後に続く者にしっかりと伝える責任があるのです。それぞれの科学の歴史を刻み、反省と展望を確かなものにしなければならないのです。

さらには、ほかの研究者とか、ほかの領域、科学とのつながりという意味での交差的継承性もあるべきでしょう。すべての科学がそうですが、人にかかわる研究は、自分の展開している研究の狭い世界でのみ意味をもつのではなく(心理学の場合には、少なくとも、ほかの科学と無縁な領域はないのですが)、必ず網の目のネットワークで多くの科学と関連しています。その照合は欠かせません。とりわけ、日本グループ・ダイナミクス学会もそうですが、日本社会心理学会の設立の趣旨、設立から間もない時期の「社会心理学会会報」の記事にこの動きや実際の連携が主要な活動として繰り返し登場しています(本合同大会会場にその一部はパネル展示として紹介した)。このような諸科学との連携やそれぞれの研究成果の照合は、研究者および教育者の責任であると言えます。現在の大学教育の場面で、この種のことはどのくらい遂行されているのでしょうか。

研究には短期的な目的で、今あるこういう流れの中でこれが必要だということと同時に、もっとその研究が人類のためにどうなるのか。そういう、そこまでわれわれは考えるべき、将来につながる目的を考えなければならないと思います。

このシンポジウムは、このような意図を含みもちながら、研究テーマの設定自体が社会的、時代的な諸要因との密なるつながりで「表れる」ものであり、かつ、科学の歴史を反映するものであります。ただし、諸科学との連携自体に意味があるのではなく、なにをどう切り取

って共同の研究が行われるかが重要です。そして、研究は内外へ発信されてこそ、認められ、後に続く者に影響を与えることができる。

この趣旨を込めたお話を3人の話題提供者からいただきます。その後、指定討論をしていただきます。そして、その後にフロアからの質疑を受け、指定討論者の方からの指摘とフロアからの質疑を含めて、話題提供者からの応答をいただきます。さらに、また指定討論者からさらにあればコメントをいただくということで進めていきたいと思います。

で、山口 勸先生はご存じのように、文化的な観点というものをしっかりと踏まえた非常にマクロな広がりのある研究をされている先生でございます。文化固有の発想に着目された研究を展開されておられ、本日は、その観点から日本独自の進化論である今西理論を素材にしなが、研究の国際的な発信についてお話しいただきます。詳しくは後ほどご本人からいただきたいと思っています。

小口孝司先生の場合には、職場での仕事と人間関係の問題、そこで必要なスキルや、ホワイトカラーの行動、職場のダイナミクス、「観光」が地域、国、個人との総合的な活動総体であることなどに早くから取り組み、非常に現場といいますか、そこに根ざした研究を先進的にされておられます。正しく、本シンポジウムの目指している、研究者、地域住民、顧客にとっての研究の社会的意味を考えられておられます。

三浦麻子先生は、インターネットの問題、テキストマイニングの問題、ウェブログの問題というふうに今、われわれとしてはツールとして非常に有用として使っております。この類のテーマをそれぞれに、幅広いネットワークを形成しながら研究展開しておられます。

指定討論をいただきます、永田良昭先生は、日本社会心理学会の元会長であられ、学習院大学の学長も歴任されておりますが、社会というものを常に意識した研究をすべきということを常に主張されておられます。

吉田寿夫先生の研究方法についての慧眼に日頃尊敬しています、分析方法ということを非常にきちんとした信念、視点をもたなければその研究というのは意味がなくなるということを述べられ、研究の仕方こそ研究の重要な価値があると警鐘を鳴らされておられます。

各発表者、指定討論者の方々は概ね10年くらいの年代差があります。おそらくその過ごされた年代によって受ける教育やその育った世代・文化環境なども違う、そういうことも今回話題提供者をお願いする私の意図に入っております。

それでは、個別の発表をそれぞれお願いしたいと思います。

## 国際的な影響力の向上をめざした研究

山口 勸(東京大学大学院人文社会系研究科)

私は、「歴史を踏まえ、この先に生きる社会心理学の展開を目指すために」というシンポジウムのお題をいただきまして、最近、いろいろプレッシャーがかかっている「国際的な影響力の向上をめざして」というサブタイトルを付けさせていただきました。

まず、こういうテーマを考えましたのは、浦会長が2009年にグループ・ダイナミクス学会会長に就任された際のニューズレターで、日本で行われている社会心理学研究の質的向上にもかわらず、なかなか国際的に発信されていないのが残念だ、とお書きになっていたことが大きな理由となっています。そこで、どのようにしたら、より多くの研究を日本から発信し、かつ影響力をもてるようになるか、というテーマで考えさせていただきました。

最近、進化心理学が盛んになり、特に今年はダーウィンの生誕200年ということで、いろいろな論文も出ていますので、日本で非常に有名な今西理論をとりあげて、その国際的な評価について考えることにします。この理論については、私の場合、大学院生のころに読んで、そのままになっていましたが、彼の理論的視点から一体どのような新しいことが言えるかについて、改めて考えてみました。

最近ではどの分野でも国際化が重要課題になっています。ただ、「海外発信しなさい」と言うのは簡単ですが、実際に海外発信を試みるときに一体どういうことが起こるのかについては、あまり知られていないように思います。今西本人は海外発信を拒否していたので、海外発信しないとどうなるかという例として彼の理論の国際的な評価についてみたいと思います。次に、私の場合にはいろいろと海外発信を試みてきて、いろいろな経験をしていますので、その際にどのようなことが起こるのか、について自分の経験に基づいてお話をしたいと思います。

最後に、われわれの日本の社会心理学者、それから社会心理学会、グループ・ダイナミクス学会が学会として、どのようなことをなすべきか、ということについて、私なりの提言をさせていただきたいと思います。

### 国際発信を拒否した今西進化論の運命

まず、今西理論、日本では非常に有名な理論で、特に私と同じか、それよりも上の世代の方にはよく知られていると思いますが、若い方はあまりよくご存じでない可能性が高いので、簡単に理論の説明をします。

まず彼自身は、国際的な発信を拒否していて、「正当派進化論者からみたら異質の進化論、こういうものも成り立つのだということぐらいは、もうすこし宣伝してもよいのではないか。どこかから意外な反響がでてこないともかぎらぬから、私の進化論を外国語で書いて発表したら、とすすめてくださる方もあったが、種社会でさえまだ認めることのできていないような相手に、それ以上のことをいってもわかるはずがない。なにも急ぐことはないのだから、私の達者な日本語で書いたこの一文を、『ブリタニカ国際大百科辞典』に託して、しずかに後世の批判を仰ぐことにした方が、かえって賢明ではないかと、考えたりもしている近ごろの心境を、最後にしるして筆をおく」(今西, 1976より)と書いています。しかし、国内では非常に高い評価を受けて、ノーベル賞候補として推薦する人もいたほどです。実際、彼は文化功労者になっています。彼が主張したのは、反ダーウィンの進化論です。彼は、突然変異も自然淘汰も否定しました。「ある種のサルが人類になるべくして人類になったんだ」という非常に大胆な主張をされたわけです。これを受け入れるかどうかは、人によって違うと思いますが、この話はもう決定論に陥っているとみなす人が多いと思います。今、インテリジェントデザインとか言っていますけれども、神様がお造りになったという説に直結するような説明になっているわけです。これは、上で引用したように、ダーウィン流の進化論の信奉者には、なかなか受け入れられないだろう、というのはだれにでもすぐに分かります。

ただ、彼の説でユニークなところは、競争ではなく、類縁の近い種の「棲みわけ理論」を提唱しているという点です。これは彼のフィールドスタディーに基づく主張です。彼は、個体レベルの生存競争よりも、共生という側面を強調しました。さらに、種のレベルの進化を強調しています。こういった視点は、日本の中のいわば保守的な価値観とうまく合致して、日本の思想界で非常に高い評価を受けた、ということ自体は少しも不思議なことではありません。

今西は、こうした彼の理論を国際的に発信することを拒否していたわけですが、その結果として国際的に無視されていたかというと、そうでもありませんでした。少し探してみましたら、『NATURE』の中に論評を見つけました。『NATURE』の1985年のCOMMENTARYのセクションに、Halstead という人が書いています。

「Anti-Darwinian theory in Japan」というタイトルでしたので、「ああ、無理に国際的に発信しなくても、この理論は国際的に評価されたんだな」と思ったのですが、よく読んでみると、むしろ理論を議論してくれたというよりも、副題、「The popularity of Kinji Imanishi's writings in Japan gives an interesting insight into Japanese society」、が示しているように、日本文化についての論評に多くの部分を割いていました。

そして、大変残念なことに、理論の対立についての論評というよりも、むしろ文化的な対立(日本文化批判)になってしまっていました。今西は、ダーウィンの進化論というのは、個人主義的な西洋文化に根差したものであるとして批判していました。要するに、ダーウィン流の進化論では、個体レベルの競争、すなわち生存競争、というふうに理解して、個体レベルで議論していました。今西は、その点を強く批判していたわけですが、Halstead の批判というのは、今西理論が集団主義的な日本の文化に根差している、というものです。こまではよいとしても、さらに何を書いているかというところ、*“Real life in Japan is very hard for ordinary people, everyone is in a desperate rat-race, Imanishi gives dreams and hope to the Japanese people”*と続いています。私がこれを読んだときに非常に残念だったのは、『NATURE』のエディターがこのような客観的な事実に基づかない偏見とも思える COMMENTARY を掲載したことです。

Halstead の日本文化批判はさらに続きます。*“the scientific community in Japan is characterized by the virtual absence of debate or any kind of intellectual confrontation”*という学会批判、さらに *“the rigid authoritarian feudal society that masquerades as one of the advanced nations of the world”*とあります。世界の先進国のマネ、フリをしている硬直した権威主義的な封建社会だということです。これをどこかの国の保守的な新聞が書くのでしたらまだ分かりますが、『NATURE』にこのような COMMENTARY が掲載されたことに驚きました。

私から見れば、これはまさしく文化的な対立であって、しかもここまでのことを著者に書かせるというのは、Editor の日本に対する態度を反映したものです。どの文化が批判の対象になっていたとしても、明らかに好ましくない COMMENTARY だと思いますが、これに対して今西自身による『NATURE』誌上での反論は見つかりませんでした。この COMMENTARY に対して、外国人が、こういった表現は好ましくないという趣旨の反論を書いているのと、日本人も反論を書きますが、それらの反論において今西は共著者になってはいませ

ん。

今西は、発信しないことによってきちんと自分の理論を議論して理解させ、修正すべきところがあればそれを修正する機会を逃した、と私は思います。そのために、彼の理論的な貢献が十分に評価される機会も逃しています。彼が自分の理論で主張してきたように、グループレベルでのセレクションも考えようという立場の人が、西洋にもいるにもかかわらず、そういう人たちの書いた論文に、今西の理論が引用されていません。要するに、国際的には存在しなかったに等しい状況で終わってしまっているのです。これは非常に残念なことです。

もしも、彼がきちんと国際的に発信していたらどうなっていたでしょうか。私が少し調べただけでも、進化論が現在でもまだ確立しているとは言えないことがわかります。例えば、最近、エピジェネティクスという現象が知られてきています。ご存じの方も多いと思いますが、これは、DNA 配列の変化を伴わない、遺伝情報の発現の制御のことです。つまり遺伝子情報を書き換えずに遺伝子の機能をオン・オフすることが行われていることがわかってきました。さらに、これは生殖細胞がつくられる際にはリセットされると考えられていたけれども、消去されないケースもあるらしいということが分かってきました。これは遺伝子レベルでのみ考えてきた進化論の立場からすれば、当然修正を迫られるような現象が出てきているというわけです。つまり、親から子にエピジェネティクスによる変化が継承されることがあるということは、遺伝子変異以外の遺伝の可能性があることを意味します。もっと言えば、獲得形質が遺伝するというような話になるかもしれません。

さらにもう一つあげて言えば、自然淘汰されるのは、固定化された精神モジュールであるという考え方がありますけども、そうではなくて、環境に適応する柔軟性を人間は獲得してきたのかもしれない。もしも後者の立場をとれば、当然進化心理学の前提が大きく影響を受けてきます。

また、マルチレベルの淘汰を考えなくてはならないという立場があって、social biology の Wilson たちがこういうことを書いています。*“Selfishness beats altruism within groups. Altruistic groups beat selfish groups”*つまり、集団の中では利己的に振る舞っていると向社会的な人よりも勝るが、向社会的な集団のほうが利己的な集団には勝つということです。これは社会心理学にとってのインプリケーションもあって、集団内で利己的に振る舞うと確かに得をするかもしれないけれども、ある程度以上、利己的な人が増えたら、そういう人たちに対して、集団として何らかの制裁措置を導

入するか、あるいは個人が態度を変えるかしないとはほかのグループとの競争に負けるということです。

われわれが置かれた状況を考えてみても、例えば学会レベルで言えば、みんなが勝手なことばかりやっていれば、ほかの学会との競争に負ける。学問分野で言えば、社会心理学の中で勝手なことをやっていられるかもしれないけども、学問分野間の競争にはうまく勝てない、ということになります。これは、人によって進化論をどうとらえるか、ということとは違うと思いますけども、私としては、こういった視点をとるべきだというふうに考えています。

#### 日本からの国際発信の難しさ

さて、日本からの発信の場合、初めからその影響力が保証されているわけではありません。特に、定説に反する立場からの発信をする場合、非常に難しくなると思います。自分の例をあげてどんなに大変かということをご説明したいと思います。

一次的 - 二次的コントロールの区別(Weisz, Rothbaum, & Blackburn, 1984)についてはご存じの方が多いと思いますが、私はこの二分法だけでは十分ではないと思っています。そこで、これより複雑な枠組みを提案しているんですが(Yamaguchi, 2001)、それを受け入れるかどうかという読者の側の判断が、文化によって影響を受けています。まず、コントロールはWeiszたちが言うように、「意図した結果を引き起こすこと」でよいと思います。そこで、彼らは一次的コントロールというのは環境を自分が好きなように変えることで、これはアメリカ人がやるのだ。一方、日本人は環境に自分を合わせるのだ、と主張します。日本人は、環境に合わせて、自分自身を変えるのだ、というようなことを言っています。しかし、少し考えれば明かなように、日本人だって自分の好きなように環境を変えたいわけで、いつも自分を変えているわけではありません。これは当然のことだと思います。

さらに環境をコントロールする主体について、彼らは自分だけしか考えてなくて、環境を変えるか、自分を変えるか、という議論をしますが、そうではなく、集団が主体となって環境を変えることもあるわけです。このように集団的コントロールもあれば、自分でやらずにほかの人に頼んでやってもらうという代理コントロールというタイプもあります。このようなことを論文に書いたわけです。

例えば、暗示的な personal control というのは、はっきりとは言わずに婉曲的に相手をコントロールしようとすることもあるだろうということを言って、2001 年に書きましたが(Figure 1)、論文が引用されても、議論の中身については反応してくれませんでした。最近、やや

### コントロールの主体

1. 自己 → (Personal control)
  - ・明示的 自己が主体として明示的に行動する。
  - ・暗示的 自己の主体性が隠されている
2. 集団 → (Collective control)
  - ・集団が主体として行動する。
3. 他者 → (Proxy control)
  - ・だれか他の人が主体として行動する。

Yamaguchi (2001)

Figure 1 コントロールの主体の分析

くヨーロッパの人が理解してくれて、その人の書いた論文を有名な雑誌に投稿したものが、私にレビューが回ってきましたので、わが意を得たりと好意的なレビューを書きました。ところが、ほかのレビューアーは、いろいろなタイプのコントロールが出てきて、この論文は理解できない、と判断し、結局掲載不可となってしまいました。

この暗示的なコントロールを例にとりて、この問題を説明しましょう。小嶋が 1984 年に書いているエピソードがわかりやすいと思います。落語の師匠が、楽屋で下手な歌を歌っている弟子を止めたいときに、「お前、歌をやめろ」と言うのではなく、わざと逆に、「お前、歌うまいな」と言って褒める。それを聞いて、弟子のほうは「あ、これは怒られてるんだ」と分かってやめるということです。これは婉曲的に相手をコントロールする、よい例だと思います。師匠は、こういう言い方をすることによって、直接的な対決を避け、弟子が自分で理解する機会を作ったわけです。しかし、このような説明は、私も外国の学会でときどき話をしますが、聴衆、特に西洋の人はよく理解できません。これは結局、文化的な土壌の違いに由来しているのだと思います。

それでは、どうしたらよいのでしょうか。日本発の研究の影響力を高めるために、まず、個人のレベルではもちろん国際的発信に努力しなくてはならない。当然のこととして、学会発表、論文執筆をする必要があります。それから、海外の研究者とのネットワークをつくることも、非常に大事です。こうしたことは、個人的な努力で何とかなることですが、集団レベルでないとできないこともたくさんあります。例えば、学会レベルでは、電子ジャーナルの集団購入を考えるべきだと思います。最近印刷版だけでなく電子ジャーナルが一般化化してきています。これを使えるかどうかで、研究の生産性が随分と影響を受けるでしょう。大学レベルでの共同購入も考えられます。例えば、カリフォルニア州立大学のコンソーシ

アムをつくって、州立大学がまとめて出版社に交渉することをしています。こうしたことは、本当は国レベルでやるべきことだと思います。

それから国際的な発信スキル獲得の機会を提供することも考えるべきです。これもグループ・ダイナミクス学会で浦会長にご努力していただいて、英文校閲の費用を 50%まで補助するとか、両学会とも海外の学会の旅費の補助とかをなさっていますけれども、こういったことももちろんやる必要があります。

それから、学会自体の国際的影響力の向上も、目指す必要があります。いわば、アジアの視点が受け入れられるためのインフラの整備です。2010 年に Social Psychological and Personality Science という雑誌が創刊されましたが、これはコンソーシアムをつくって、EASP、SPSP、SESP、ARP というアメリカとヨーロッパの学会が母体となり、アジア社会心理学学会(AASP)とオセアニアの学会がスポンサーになっています。ここで大事なのは、AASP がスポンサーに入ることによって、エディトリアル・ボードを決めるときに、影響力を行使できるだろうということです。アジア的な視点のわかる人にレビューをしてもらわないと、アジア的な視点に基づいた論文が掲載不可となることが減らないと思います。このようにアジア社会心理学学会が、国際的な影響力を増すことは、必ず皆さんの国際化の利益になるはずです。

#### 結論

日本の社会心理学者が日本人を対象として行う研究は、否応なく日本文化の影響下にある、という研究の文化的な基盤を自覚することが必要だと、常々考えています。つまり、無国籍の社会心理学はやめよう、と皆さんにご提案したいと思います。アメリカの理論をもってくるとはよいのですが、その理論が日本の文化の中で意味をもつものかどうかを批判的に吟味しておく必要があります。そうでないと、理論から予測された結果が得られなかったとき、それが何を意味するのかを判断することができません。アメリカで得られている結果を、日本人を対象にした研究結果によって否定することは、まず不可能ですから、文化的な要因をオリジナルの理論のどこかに組み込む必要があります。それを迫るだけの影響力が必要になるわけです。そのときに、すでにご説明してきましたように、個人で努力するのはもちろんですけども、それにはやはり限界があります。学会レベル、本当は、国レベルでのサポートが必要である、ということを強調して私のご提案を終わりにいたします。

#### コメント

まず、永田先生からのコメントですが、先生がご理解

いただいたとおりでよいと思います。特に、何を発信すべきか、ということについてお答えしますと、究極的にはわれわれは実践を目指すべきだと思います。私は、社会心理学は基礎科学ではあり得ないと考えています。進化論の話をしたので、進化論を例にお話ししますが、何が正しい進化論なのかを、われわれ社会心理学者が決めることはできません。どの進化論が好きかというのは、自由に決められるし、どの立場の進化論に基づいて自分の研究の前提を置くかということも決められますが、現代の人間を相手にした研究の結果から、どの進化論が正しいということを確定することはできないと思っています。

エビジェニクスの研究成果はこれから一体どうなるか。われわれがそこに入っていって、おそらく研究できる人はいないでしょう。そうしますと、やはり社会心理学が社会心理学として成り立つためには、やはり実践的な貢献をする以外にはないだろうと思っています。それは先ほどお二人の方々がおっしゃっていたとおり、ほかの分野との協力で社会貢献するというようなことも含めて、われわれはいわば、(最近 Evidence-Based Medicine という言葉がはやっていますけれども)、Evidence-Based Social Practice を提供できるようにならなくてはいいないと思います。

私はまだ何も実践研究をしていません。最近考えているのは、理論的にきれいな研究もいい、方法論的にきれいな研究もいい、結果もきれいな結果を出せばいいのだけれども、やはりそれは最終的には実践に結びつかなくちゃいけない、ということです。それをどのようにして行ったらよいか、ということをこれから考えていかなくてはいいけない、と個人的には思っています。

ですから、吉田先生に対するお答えにもなりますが、研究法の基礎が不足しているというのは非常に頭の痛い問題で、先生がおっしゃるとおりだと思います。これは日本の大学に多くの教員を抱える余地がなく、教育が行き届かないためだと思います。本当は、それぞれの大学に吉田先生のような教員がいて、しっかりと方法論を教育してくれるのが理想的ですが、現実はそのようにはならないので、やはりこれも学会レベルの取り組みが必要だと思います。特に統計的な手法はどんどん進歩していきます。例えば、マルチレベル分析を使えないと、グループレベルの分析をきちんとできないということになるわけです。ですから、この手法の勉強をなさうと言うのはやさしいですが、モデルが複雑になってきていますし、ソフトの使い方も勉強しなくてはならないので、学生が独学でマスターすることは非常に難しいと思います。だからといって、この手法をそれぞれの大学で、あるいはもっと小さい研究室で、きちんと教育し



なさいと言われても、実際問題としては無理なので、やはり学会レベルの取り組みが必要になります。

ですから、本当の意味でのワークショップのセッションを学会の前後に提供して、院生とか、若手の研究者が安い費用で参加できるようにすることが、非常に重要だと思います。

### 引用文献

Halstead, B. (1985). Anti-darwinian theory in Japan. *Nature*, **317**, 587-589.

今西錦司 (1976). 進化とは何か 講談社学術文庫

Kojima, H. (1984). A significant stride toward the comparative study of control. *American Psychologist*, **39**, 972-973.

Weisz, J. R., Rothbaum, F. M., & Blackburn, T. C. (1984). Standing out and standing in: The psychology of control in America and Japan. *American Psychologist*, **39**, 955-969.

Yamaguchi, S. (2001). Culture and control oritations. In D. Matsumoto (Ed.), *The handbook of culture and psychology*. New York: Oxford University Press, pp. 223-243.



## しなやかな社会心理学を 多様な価値観・戦略による発展を目指して

小口孝司(立教大学現代心理学部)

大坊先生からお題をいただき、私なりに考えさせていただきました。昨日のシンポジウムでご登壇された先生方とか、今日の山口先生のような洗練されたものではなくて、もうちょっと泥臭いというか、一般の研究者でもできるようなことを考えましたので、それについてお話をさせていただきたいと思います。

タイトルは「しなやかな社会心理学を」です。多様な価値観をもちつつ、戦略的な発展を目指していきましようということが申し上げたいことです。

パンダは動物園では大変な人気者です。このパンダのように、社会心理学も人気が高く、社会心理学会も心理学諸学会の中では圧倒的な会員数を誇っています。昨日の大坊先生のスピーチにもありましたように、社会心理学会は、臨床心理学、教育心理学に次いで大きな学会になっているのが現状だと思います。実際、その大学教育においても非常に人気が高く、一般教育においても受講者数が多いのが通例です。専門教育においてもゼミの希望者数でもとても多いのではないかと思います。諸先輩の先生方のご尽力の賜物だと思っています。

ここでさらになる発展を期するためにはどうするかを愚考していききたいと思います。一つが「目の上の臨床心理学? !」。少し語感が良くないですけども、ぴったりのものが見つからなかったので申し上げるのですが、急伸した臨床心理学。私が学部生の頃には、臨床心理学というとか、一つ別のもので、心理学を希望する学生の中でもそんなに多くない人数の方々が取り組んでいらっしゃるというイメージでした。ところが今見ると、心理学を希望する学生のほとんどが臨床心理学希望です。私立大学などは特にそうした傾向が強く、教員の大多数が臨床心理学である大学も少なくありません。その次に社会心理学が少数いらして、基礎系の先生方は統計を教えたり、パソコンを教える教員であったりしています。そのような状態にあるのではないかと思います。

なぜこれほどまでに臨床心理学がその勢力を急拡大したのでしょうか。こうした動きとは逆に、学問的な成果に固執して、学生に人気がない領域もあるようです。こうした現状を鑑みると、採るべき方略が見えてくるのではないかと思います。

方略としてはたくさんあると思いますが、一つの方略

としては今スライドで映しておりますが「心理学検定」。大坊先生が中心になって進めていらっしゃるのですが、こういったものも非常に大きな、社会心理学の勢力を拡大するための大きな方略になると思っています。では、こういった方略の背景にあるものは何なのかというのを見ていきたいと思っています。

ただその前に、社会心理学というのは、誰のものなのだろうかと考えてみたいと思います。多くの研究が、研究者の研究者による研究者のための、極端に言ってしまうと、研究者の趣味とか、あるいは業績づくりのための研究になってしまっているのではないかとさえ思えるようなものも少なくはないと考えられます。

昨日も学会大会発表を拝見していたのですが、その中では、「うん? これはこの研究をすることによって、こういった社会的な意義があるのかな」と疑問を感じるものもありました。きっとこの研究対象に対して非常に興味、関心があるのだろうと推量したのですが、その次はどうなるのか分からない研究がいくつかありました。

「研究者の」というのは、すべて研究者のためにやるわけではなくて、実行するのは研究者ですが、その際に対象が社会にあり、社会から研究対象とすることが求められており、社会からサポートを受ける、そういった社会による研究と、社会のための研究が必要ではないでしょうか。研究対象としての社会が欠如しているという批判もありますし、あるいは営為そのものへの当為に關しての批判というのも当然出てきていると思います。

ここで「お客様」というのは誰なのかを考えていきたいと思います。日本における社会心理学を発展させるためには、お客様が誰なのかを考える必要があるからです。そしてお客様に対して誰が、どのように行動していくのかを考えていかなければならないでしょう。

お客様というのは、いくつかに分類できると思います。一つの分類として、文部科学省であり、マスコミ、それから地域行政とか企業、そして学生・保護者というように分けることができるでしょう。

それから「誰が」です。立ち位置によってアプローチの仕方が違うはずですが。学会という公的な機関、テニユアを得た研究者、そして大学院生という立場においても、アプローチは違ってくると思います。これらは、あくまでも私の経験論からの推測に過ぎませんが。

第 1 番目のお客様ですが、それは文科省でしょう (Figure 1)。本来はお客様であるべきではないと思うのですが、それは置いておいて、実際に文科省はスポンサーになっており、有り体に言えば、お金をくれる存在です。例えば、交付金とか、競争的資金、科研費とか、特定領域とかがあります。そうするとそこで大学間で競争していきます。あるいは専門領域間の競争が起こります。で、これに勝ち残るためにはどうするかというと、端的に言えば、先ほど山口先生がおっしゃってくださった、あるいは昨日亀田先生がおっしゃっていたような、スター研究者が国際的な学会誌において特に引用回数が多い、Impact Factor が高いところに、いかにして著名な学会誌に多く掲載され、引用されるのかということが大事になってくると思います。



Figure 1 第1のお客様、文科省？

ただ、この戦略というのは、国立大学の法人の上位校型に当てはまるものだと思います。例えば、旧帝大とか、それに準じるようなところで非常に求められていることだと思います。だからそういうところでは日本の学会誌論文などはあるのが当たり前で、評価されるのは英語で書いた学会誌がどのくらいあるかによります。しかもレベルの高い学会誌がどのくらいあるかによって評価されています。

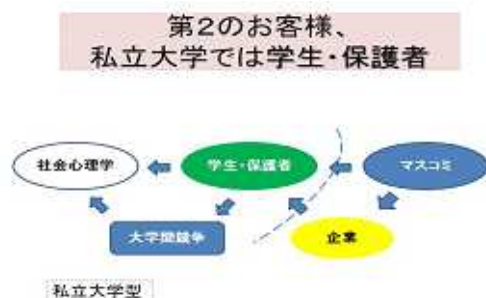


Figure 2 第2のお客様、私立大学では学生・保護者

しかし、社会心理学の先生方は旧帝大とか、そういうところばかりにいらっしゃるわけではないですし、それ

以外の方がほとんど、大多数だと思います。そうすると、そういう方のところ、つまり私立大学が大部分ですが、第 2 のお客様として、学生とか保護者があたるでしょう (Figure 2)。そうすると、社会心理学は面白いとか、社会心理学を専攻してみたいなという学生の希望が大きくなると、それでは今度学部にしてみようとか。こうしたことで勢力が拡大されると思います。その際にマスコミとか、企業とかいうものも、そのような学生とか、保護者の意思決定に影響を及ぼしているでしょう。これは私立大学型のお客様のとらえ方になると思います。

第 3 のお客様は、企業とか、地域とか行政です (Figure 3)。これはあまり一般的ではないかもしれませんが、社会心理学において、企業とか、地域行政から資金とか、社会的ニーズの提供を受けて、それに対して社会心理学が情報技術とか、人材を提供していくということがあります。これは多分、三浦先生が後でお話しいただくようなことに近いと思います。特に人材の面です。私もさまざまな企業とお付き合いをさせていただくのですが、すごく優秀な方々が集まっているところがあります。研究もどきのことはできるのです。しかし、実際に研究をやってみていただくと、どうしても欠けたものになってしまうのです。それではまずいというところがたくさん出てきてしまう。やはり、大学院の 5 年、学部からだと 9 年というトレーニングを経た人の強みがあるので、そういうところで人材を供給していくことができると思います。特に企業については、有名大学が該当するでしょうし、地域行政については地方大学において求められていることでしょう。



Figure 3 第3のお客様、企業、地域・行政

このお客様の構成、この概念図というのを考えてみると (Figure 4)、まず社会心理学というのがあって、その社会心理学を支えてくれる一つのものとしては、文科省という大きなものがあります。圧倒的ですよ。次には、学生とか保護者の方、一般の方です。この二つに影響を及ぼすものとしてマスコミがあるのだと思います。



Figure 4 「お客様」構成の概念図

文科省は Impact Factor とか、学術的な評価の高さを求めます。しかし同時に、文科省から資金を獲得する際には、どのくらい社会的影響があったかというのが随分判断の材料になったり、そうしたものを求められたりもします。つまりマスコミに対しての露出がどうだったのかとか、そこでどういう反応があったのかということが非常に重要視されることがあると思います。もちろん学生とか、保護者の方もマスコミの影響を非常に受けます。ですからマスコミが重要になってきますし、マスコミに影響を与えるものというか、ネタを提供するものとして、地域だったり、行政であったりとか、あるいは企業があるでしょう。

そうすると、直接的には文科省からお金をいただいて、専門の基礎研究は、中心的な方々が活動されるお金が出てきます。その一方で、私立大学というような形でお金をいただいて、多くの研究者が成り立っているという状態もあります。そうすると、この二つは理解しやすいのですが、マスコミ、地域・行政、企業の関わりが分かりづらいので、次に考えてみたいと思います。

一つ目のターゲットがマスコミです。そこでまず求められることは、メディアへの影響を大きくすべきということです。学会としては、方向性を持ったメディアへの活動指針が必要になるのではないのでしょうか。それからメディアに大きく取り上げられていることを尊重する、メディア出現への肯定的な雰囲気を醸成する必要があると思います。メディアにたくさん出られている先生方は、「学会とかに行っても、白い目で見られるんだよ」とすごく嘆かれる。そういう先生方は、確かに海外の一流誌に論文を出されているわけではなく、テレビとか、雑誌とかでお名前を売っていらっしゃる。いわゆるトップレベルで研究されている先生方からすると、「何やってるんだ」という思いがあるかもしれません。しかし、先ほど申し上げたように、文科省に対してもマスコミを通してフィードバックされていきますし、一般的の方に対してフィードバックされていくので、少し考えるとそういった先生方を白い目で見るということは到底あり得ないと思います。むしろ、そういう先生方にお力をいただくことのほうが大事なのではないのでしょうか。

次はテニユアを得た研究者の場合は、積極的な発信をしていく必要があると思います。しかし、大学院生では特になく、かえってやらないほうがよいとも思います。これをやるとそれこそ白い目で見られかねません。少し大人しくしていただいたほうがよいかもしれません。

出版物の例ですが、例えば山岸先生の有名な『信頼の構造』は皆さんがお読みになっていらっしゃると思います(山岸, 1998)(Figure 5)。日経賞などのいろいろな賞を受けて、非常に高い評価を得ているものです。もちろん社会心理学会の中でも高い評価を得ていると思います。一方、『影響力の武器』という、安藤先生が中心となって翻訳されている本があります(チャルディーニ, 2007)。これはそれこそ Amazon の中で、ずっと社会心理学とか、心理学関連の本の中でトップの売れ行きを記録しています。すごい部数、売れています。

私もほんの少し関わらせていただいているのですが、企業の方とお話すると、「えっ、あの『影響力の武器』を訳されたのですか」と驚かれることが多いのです。ほんのちょっとですよ。にもかかわらずすごく感激していただいて、「実験社会心理学って面白いですよな」と言ってくれるのですよ。一般の方が「社会心理学」ではなくて、「『実験』社会心理学って面白いですよな」と言ってくれたことで、私はすごく感動したのです。一般の方に実験社会心理学を広めているのです。この本を元ネタにしてさまざまなセミナーが行われていたりしています。本当に、実験社会心理学を世に広めているのです。原本を書かれたのはチャルディーニ先生で、これを翻訳されているのは安藤先生だということもあるのですが、こういったものに対しては学会としては特別に何の評価もしていません。しかし、社会に与えたインパクトということを考えると、場合によっては山岸先生の著書よりも遥かに大きな影響を与えているのかもしれないのです。こういうことも考えていかなければならないのではないのでしょうか。



Figure 5 出版物の例

二番目のターゲットは企業です。企業にとって有用な研究を奨励していくことも必要であると思います。そのときには、学会では企業からの評価とか、示唆を積極的に受けていく、もらっていく必要があるでしょう。この後三浦先生がおっしゃってくださいと思いますが、研究者としては積極的なコラボレーションを図っていくことが求められると考えられます。院生としては、積極的に参加して、ノウハウの習得をしていく必要があります、このことが将来の選択を広げることに繋がると思います。

企業に有用な人材を提供していくことが必要で、そのためには、博士・修士課程の修了段階でマッチングを図り、企業ニーズの発掘とか、インターンシップを企画するとか、そうしたこともできるはずで、現実にはなかなか難しいとは思いますが、研究者としても企業の課題に関連した研究テーマを行っていくことが大事になってくるでしょうし、院生の方としても就職先として意識していくことが求められているでしょう。それこそ、学会員として 500 名以上もいらっしゃる院生を、とても大学や研究所で全員教員や研究員として将来採用しきれものではないはずで、少なくとも現状では、そうすると、おのずとほかの分野に打って出ることが必要になると思います。その際に企業に行くというのが大きな選択肢となるでしょう。大学はこれからますます厳しくなるでしょうし、そんなに魅力的かと尋ねられると首をひねるところもありますから。もっと企業に行き自分のやりたいことに密着したテーマを研究するというのは、非常に有意義なことでしょう。

ターゲットの三番目です。地域・行政です。今後、地域・行政の視点を入れた研究の活性化が必要になるでしょう。活発な研究分野もあります。地域と密接に結びついて研究成果をあげている学問領域があります。それに比べるとやはり社会心理学は、「社会」と冠しているにもかかわらず、不十分なところがあるのではないかと思います。ですから学会としても、フィールド研究をもっと尊重していかなければならないでしょうし、研究者も学部学生とか、院生を巻き込んだ、教育を行っていく必要があるでしょう。院生も社会との接点を積極的に求めていくことが求められていると思います。

学会としての一方略ですが、学会賞の多様化ということも求められているのではないのでしょうか。研究として優れているということは当然ですが、それ以外にも社会との接点をもっている研究に対して、学会としても推進していくという態度が必要だと思います。あるいは学会誌に活動録、あるいは実践報告論文などを出していくことを考慮してもよいのではないのでしょうか。

さらには、一般向けの啓蒙書とか、紹介書の編纂というのがあると思います。「ご近所の底力」みたいな本が

必要なのではないのでしょうか。例えば、社会心理学関係では、安藤先生、松井豊先生が編集者をなさっていらっしゃるセレクションシリーズは、心理学関係の学科の学生さんたち、専門の学生にとってはなくてはならない本となっているでしょう。そういったセレクションシリーズよりもさらに易しく、もっと分かりやすく、極端かもしれませんが、小学生でもわかるようなものが必要になっているのではないのでしょうか。しかもメジャーな出版社と契約していった、広い認知を得ることが必要になってくるだろうと思います。

その中身としては、例えば、大坊先生とか、相川先生とか、堀毛先生が研究されているようなソーシャル・スキルのようなテーマもあるでしょうし、あるいは吉田先生がなさっているような迷惑行為とか。このほかにも沢山あって、防災とか、孤独感とかいろいろなテーマが考えられると思います。そういったものを公刊していくことによって、広く認知され、その研究者の力を借りてみたいということが出てくるのではないのでしょうか。

では、あなたは何をしているのかと尋ねられるでしょう。私は一つの研究対象として観光に取り組んでいます。例えば、黒川温泉が九州にあります。関東の方はあまりご存じないかもしれませんが、関西以西の方にはすごく有名なところだと思います。山の中、片田舎にある温泉地が、たった二十数軒しかないのですが、そこが全国でもトップ 10 に入るような人気の温泉地になったのです。そのときの立役者が後藤哲也さんという方です。何回かお話を伺っています。後藤さんの実践されていることは何かというと、まさに社会心理学なのです。社会心理学は全く学んではいらっしゃらないのですが、経験則からでしょうが、方法としては社会心理学の手法を用いて、仮説を立て、それを検証し、それをフィードバックして自分の旅館を良くして、町を良くして、お客さんと呼んでくるという方略をとっていらっしゃるのです。そういう実践を拝見すると、社会心理学が非常に役に立つという実感を強くもちます。さらには、私は少し出雲市の観光のお手伝いをしたりもしています。私の社会心理学の知識がわずかながらですが、お役に立つようです。ですから観光の分野において、社会心理学の活用が求められると感じております。

観光というのは、国の最重要政策の一つです。観光庁も 1 年前に発足しました。疲弊した地方の活性化の切り札が観光だとされています。それゆえでしょうか、観光の学部が創設されています。ですから地方を活性化するとか、新しい大学をつくるとかに社会心理学が関わらない手はないでしょう。ポストはそこにあるのです。活動の場がそこにあるのです。なぜ社会心理学が



関わらないのか、私には不思議でなりません。

もうお一人の有名な方、日本ではあまり有名ではないかもしれませんが、世界的には非常に有名な方で、私の中では典型的な方だと思っているのが、Jil Jordan(cf. ジョーダン, 2003)という方です。皆さんは多分ご存じないと思いますが、心理学者であって、大学の先生もされていたのですが、彼女はオーストラリアのクィーンズランド州のマレーニというところで、コミュニティ再生活動をしています。例えば、地域通貨をつくったり、ユニオンなどを作ったり。環境、経済、社会の3側面を一緒に考慮して、その地域を発展させたのです。心理学者がそういうことをしたのです。クリスタルウォーターズというのもパーマカルチャー・ヴィレッジで有名ですが、その設立を支援していったのです。だからこのマレーニとか、クリスタルウォーターズの今の隆盛をもたらしたのは、このJil Jordanといっても過言ではないでしょう。彼女も心理学者です。だから日本でもこうした活躍ができるのではないかと考えています。

日本の社会心理学者とか、学会は何かできるはずだと思っております。これだけ有能な方が揃っていらっしゃるのだからなおさらです。さらには、それぞれの長所を生かした多様な貢献ができるはずで、昨日のシンポジウムで、亀田先生がおっしゃっていただいたことは、非常に私には興味深く、面白く拝聴しました。亀田先生というのはきわめて有能な方で、秀才の中の秀才だと思うのですが、その彼にエボックメイキングな人の草むしりしかできないと言われてしまうと、一般的の学会員として私などは、あれだけ優秀な先輩が草むしりしかできないのだったら、私はその草むしりをした草を運ぶことしかないのではないかと感じてしまいます。確かに否定できない面もあるでしょう。しかし、見方を変えると、そうでもないのではないのでしょうか。いろいろな貢献の仕方があって、多様なやり方がある。そこで個々の長所を生かしたやり方をしていくことによって、社会心理学が発展していくという道筋もあるのではないのでしょうか。

そこで、「やわらかな心とアタマでしなやかな社会心理学の発展を！」望んだらよいのではないかと考えています。以上で発表を終わらせていただきます。

#### コメント

私の申し上げたご提案に対して、シンポジウムという場もあったでしょうが、直接的に異論を唱えられる方はコメンテーターの先生はいらっしゃいませんでした。ただ、そうした提案を実施していく際のプロセスへの問題や、社会心理学の主体性、さらには社会心理学本体への還元をどのようにはかるのかについては疑問を抱かれたようですので、それらについてお話をしていた

できます。

まずプロセスから見ていきますと、観光を一つの対象にすることに対して、抵抗があるように伺えました。確かに、観光というと、物見遊山というイメージがあります。またさまざまな資源を蕩尽するというイメージが拭えません。そのため、どうしてもネガティブなイメージがもたれることが多くなりがちです。とりわけ研究者の間では、それゆえ、吉田先生も観光ということに否定的なイメージをもたれたのではないかと拝察いたします。

しかし現在、観光はサステナブル・ツーリズム(sustainable tourism)(cf. Weaver, 2005)を主流にしようとしていますので、従来の観光というイメージとは違うものになりつつあります。単なる企業が営利のために行う、個人の快楽の追求という側面よりも、地域や環境のために、関係者が協力して作り上げ、資源を消耗せずに持続的に行えるものという方向性を志向しているのです。こうした方向性ならば、多くの社会心理学の研究者の方々にも、観光をテーマとすることに賛同していただけるのではないかと思います。

また、社会心理学の主体性、自主性という問題です。永田先生にいただきました、「ユーザーの期待に応えるというのは、多分短い時間でご発言になりたいことをまとめられたせいでしょうけれども、そうすると社会心理学というもののもつ自立性というか、主体性というか、独自性というものは一体どこにあるのだらうということが知りたくなりました。」というご質問です。

永田先生は社会心理学会の会長も務めていらっしゃったので、社会心理学会を殊の外、慈しんでいらっしゃるのによく分かりますし、このシンポジウムは社会心理学会の主催でもあるので、当然の疑問であると思います。しかしながら、社会心理学会の主体性とか自立性を第一に優先させなくてもよいのではないかなとも考えます。安易な発想かもしれませんが、社会的な課題や問題を解決していくために、社会科学が発展することが大事であって、そうしたものの一つとしての社会心理学があると考えてもよいように思います。

実際に、社会心理学的な方法論なり、理論なりが、現実の問題を理解したり、解決したりするのに役立つことが広く一般にわかっていたいただければ、社会心理学に社会的な注目が集まり、それが引いては大きな支持をいただくことになると思います。それによって、社会心理学の実践研究とか、応用研究だけではなく、そうしたものの土台となる基礎研究への理解も高まり、社会心理学全体の研究基盤を強化するにつながると考えられます。基礎研究の充実をもたらすという意味で非常に重要であると思います。必要とされるならば、自ら自主性、主体性を声高に叫ばなくても、自ずとそれらを

発揮できる状況になるのではないのでしょうか。楽観的かもしれませんが、必要とされるためにはそれなりの方略を採らなければならないというのはお話しさせていただきました。

それから社会心理学が発信すべき内容がないのではないかという危惧をおもちでしたが、実際にそういう面がないわけではありません。ただ、現実の問題を抱えていらっしゃる方たち、何かの課題がある方々と一緒に考えていくことによって、そうしたものにどう対処するのか取り組むことによって、そこから出てくる知恵とか、知識とか、知見とかいうものがある、創出されると思います。

さらには、社会心理学的な理論や方法論が、社会心理学以外の場面、学問研究分野であったり、現実場面での言説となっていたりすることが、先生方が思われる以上に起こっていると思います。例えば、経営や経済分野などの論文でも使われているものを見ますし、世間のさまざまなセミナーでは社会心理学の用語が頻繁に使われたりもしているようです。ですから、発信すべき内容がないのではないか、というのは先生方の杞憂であったり、世の中の雑音にさらされていないという背景にあったりするのでもないかとも思います。ただし、常に謙虚に考えていく姿勢は非常に望ましいものであり、必要不可欠なものであると思います。

また、いかにして、上述したような営為による成果を、

社会心理学にどうフィードバックしていくのかというところでは、少なくとも私について、まだ不十分だと思います。ただ、少なくとも社会心理学的な概念や方法論を用いて、例えば観光やホスピタリティなどの異分野の学会誌には知見を載せていただいております。そういうところでは貢献していますので、いましばらくお待ちいただくと、そうした知見を社会心理学に還元していけるのではないかと、また実際に今後還元していきたいと願っております。

### 引用文献

- チャルディーニ, R. B. 社会行動研究会(訳) (2007). 影響力の武器 なぜ、人は動かされるのか 誠信書房
- 後藤哲也 (2005). 黒川温泉のドン 後藤哲也の「再生」の法則 朝日新聞社
- 後藤哲也・松田忠徳 (2005). 黒川温泉 観光経営講座 光文社
- ジョーダン, J. デジャーデン由香里(訳) (2003). 個人のライフスタイルとコミュニティの自立 沖国大ブックレット No.11 沖縄国際大学公開講座委員会
- 山岸俊男 (1998). 信頼の構造 こころと社会の進化ゲーム 東京大学出版会
- Weaver, D. (2005). *Sustainable Tourism*. Oxford: Butterworth-Heinemann.

## コラボ研究 喜怒哀楽 happy, but bumpy road

三浦麻子(関西学院大学文学部)

本日は、話題提供としては最後になりますが、「コラボ研究 喜怒哀楽」というタイトルで、中でも主に「喜」と「怒」についてお話しします。「喜」のほうは、私がどのくらいコラボ研究を面白がってやっているかという話をさせていただいて、「怒」のほうは、もうちょっとそういうことをいろんな人にやってもらえたほうがいいんじゃないかと常々思っていることと、そうなるためには現状何が足らなくて何が必要なのかということについて、日頃考えていることをお話ししたいと思います。

コラボについては、多くの言葉で説明する必要はないと思いますが、いろんな人が寄り集まって、例えば、私たちの世界であれば研究をするということになると思いますが、一つの共通のテーマに複数の個人が協力して取り組み、最終的にはそれぞれがそれぞれなりの成果をあげることができれば双方にとって一番ハッピー、という取り組みだと言えるだろうと思います。特にここでは、私も社会心理学者と、それとは異なる分野の専門家が行うような、いわゆる学際的なコラボ研究というものに着目します。

そもそも社会心理学という学問とコラボは非常に親和性が高い関係にあるのではないのでしょうか。なぜならば、社会心理学は、ほかの分野と親和性が非常に高い、ある程度の類似性を有するようなポイントがいくつもある学問であると思っているからです。このシンポジウムで話題提供をという話をいただいた後に、「心理学ワールド」という雑誌に早稲田大学の渡部 幹先生へのインタビュー記事が掲載されているのを見つけました。その中にあった次のようなフレーズが、私にとってとても共感できるものだったのでご紹介します。

「社会心理学には『心を知る』だけでなく、『社会を知る』という特徴があるため、社会科学の他分野との親和性が高く、実際の場面に応用しやすいと考えています」

(『心理学ワールド』第 46 号(2009)「この人に聞く」(p.30)より抜粋)

渡部先生は、皆さんよくご存じのとおり、経済学をはじめとする社会科学のほかの分野の方と積極的にコラボをしておられて、たくさんいいお仕事をなさっています。私の場合は、社会科学ではないのですが、主に情

報工学を専門にしている方々といろいろなコラボをさせていただいています。われわれが日常生活で利用する、あるいは社会で利用されている「モノ」をつくっている方々の研究分野と社会心理学は非常に親和性が高いと思っていて、実際にその親和性を生かそうと仕事をしているわけです。今までにご登壇された先生方や指定討論の先生方よりはるかに浅いキャリアしかない私ではありますが、研究を始めた当初からずっと、コラボはとても自然な行為だと思いますが、むしろそうすることこそが研究の醍醐味かな、と思っているところがあります。

私は、卒論を大阪大学で書いたのですが、そのときからの関心が、企業の研究開発場面でよりよい成果をあげるための人的要因や環境要因は何かを解明したい、というものでした。よい成果、というのは多重な意味をもち得ますが、私が特に重視しているのは創造性の高さです。中でも、プロジェクトチームのような複数名からなる集団によるそれに関心をもって研究を続けています。いろんな人が集まって意見や情報をやりとりし、共有することによって、個人とは異なる、ないしはうまくいけば面白いものや、ユニークなものが創り出される、独自のものが創り出されるという集団創造性は、当時から現在に至るまで、私の心の中で究極の従属変数として想定されています。最近の私は、インターネットの研究をしている社会心理学者だというような認識で見られていると思います。もちろん実際にそうであることに間違いはないんですが、そうした研究の中でも、実は集団の創造性を従属変数として念頭に置いていて、いろいろなインタラクションの中で新しいものが生まれるという過程の一つとしてインターネットを捉えています。

では具体的にどのようなことをやってきたかと言えば、異質な人々の相互作用が何を生み出すのかということに関する実証的な研究です。異質な人々の相互作用から創造性が高いものが生み出されるとしたら、そこにはどんなメカニズムが介在しているのか、といったことに関心をもっていただいています。ここで言う異質さというのは個人の属性や特性のそれではなくて、そこで取り組むべき課題に関連してそれぞれの人々がもっているアイデアや、あるいはアイデアが生み出される素地のようなもの、例えば当該課題領域に関する既存の知識などを想定していますが、そうしたものがどれだけ異



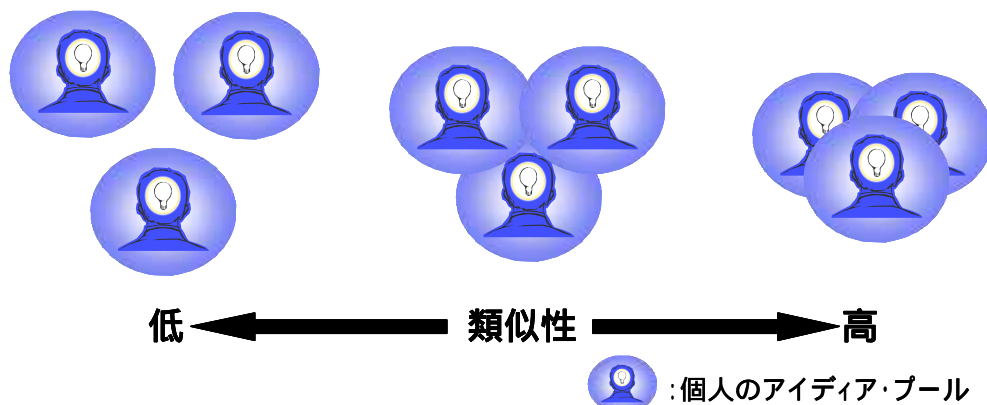


Figure 1 「集団の創発における多様性と類似性の相乗効果モデル」の模式図

なっているかということです。

最終的にこのテーマについて提案したモデルが「集団の創発における多様性と類似性の相乗効果モデル」(三浦・飛田, 2002)です。この研究自体も、福島大学の飛田操さんと私のコラボによるものです。ざっくりと中身(Figure 1 参照)をご紹介しますと、集団の一人一人のメンバーは、それぞれいろんなアイディア・プールをもっているわけなんですが、それが多様であることが、まず創造性にとって非常に重要です。ただ、それらが非常に離れてしまっていて、相互の類似性があるにも低いと、「違う」ということがデメリットとなってしまうことがある。しかし、対照的にあまりにも異質性が少なすぎて類似性が高すぎると、今度はアイディアをもち寄ることによる広がりが期待できにくくなる。私と飛田さんのコラボは、集団討議にもち込まれる個人のアイディア・プールが、ある程度の相互の類似性が存在した上で多様なものであることが、集団の創発性を発揮する際の中で素地になり得るのだ、というアイディアを実証的に明らかにした、ということになります。もともとこういうことをやっておりましたので、学際的なコラボ、すなわちある一つの大きく共通した目標をもって、社会心理学者と、現在私が取り組んでいるものであれば情報工学者がコラボするというのは、自分たちが示したこのモデルの一つの実践例であるとも言えると思います。

では現在、私が情報工学の方とどういうコラボをしているかと申しますと、やはり究極の従属変数としては集団創造性を設定したテーマに取り組んでいます。ホワイトカラー、特に研究開発部門にいる人たちは、その多くがチームで作業し、何らかの、時には複数の、創造的成果を要求されるプロジェクトに携わっています。そうしたチームがより創造性を発揮し得る環境とはどのようなものだろう、例えば具体的に言うと、よりよいメンバーの組み合わせとはどんなものだろうか、といったことを考える際に参考になれる個人や集団の変数を抽出する方法について、あるメーカー企業と、神戸学院大

学の木村昌紀さんと一緒にコラボをしています。木村さんは私と同じく社会心理学者ですが、私とは違って非言語的コミュニケーション行動などを専門にしている方です。メーカー企業の情報工学の研究者と彼、そして私とで、情報工学と社会心理学のコラボレーションということになるわけです。

こうしたコラボのほかにも、ここ数年情報工学の方とお仕事をする機会をいろいろと得るのですが、すごくあちらが、あちらとかこちらとかいうふうに河岸を変えるのはおかしいのかもしれませんが、心理学者に意見を聞きたい、ないしは自分たちのプロジェクトに入ってほしいというニーズを非常に強くもっていると感じます。実際に、私が過去に情報工学系の雑誌で査読を依頼された論文のタイトルを見ても、これらがそのまま社会心理学の雑誌に論文として投稿されていても、あるいは社会心理学でなくても、心理学系のものに投稿されていたとしても全然おかしくないようなものが並んでいます。しかし、匿名の審査なので正確なところは分かりませんが、おそらくは情報工学の人たちがかれらだけでやっているものだろうと思います。

かれらは「ものづくり」の人ですから、ものをつくることがお仕事です。そして、話を聞いていると、かれらはすごく素朴に、言葉を選ばずに言うと、とてもかわいらしくいじらしい気持ちで、人に役に立つようなものをつくりたいと思っていらっしゃる。そうしたものをつくらうとしていることに加えて、かれらにとって技術的にチャレンジングなものをつくりたい、両方の意味でより新しいものをつくることに関心をもっているわけです。ある研究でつくられる技術やツールがチャレンジングなものであるかどうかは、情報工学の中での査定に任されることですが、利用者にとってよいかどうかの検証も必要で、その際に心理学的な観点が重要になります。「良さ」というのは、例えばユーザビリティであったり、それを使ったらパフォーマンスが向上するということであったり、あるいはそれを使った人の満足度が高まるとい

うことにもなるかもしれませんが、とにかくそこには「利用者がつくられたものを評価する」という文脈が必ず登場します。

しかし、その評価というのが、漠然とした言い方になりますが、非常に弱いところがあります。査読を依頼された論文を読んでも、あるいは論文誌に掲載された論文を読んでも、心理学者の目から見ると、そこはもうちょっと、いや、だいぶ何とかできるんじゃないかと思うところがあるんですが、なかなかそれができていないという現状があります。かれらもちろんそれは大いに自覚しているところではあるのですが、何分そういうことについて教育を受けてないということもあり、したくてもどうしたらいいのか分からない、という声をよく聞きます。

そうすると、例えば私が、そういう話を直接聞けば、「私がそういうことはやっていますよ」、「こういう人がこんなことをやっていて」という話をするができるんですが、どうもかれらの多くは、私たちがそういうことをやっている、やれるような能力をもっているということをあまり知ってくれていないようです。インターネットが普及していますから、例えばキーワード検索などで情報を探すというようなインフラは整っているわけです。かれらはそういうことに当然長けているわけですから、そういう手段で発見できればアクセスがあるはずなんですが、どうも相変わらず知ってもらえていない。一般に有名な大学とか、有名な先生とかいうもの以上の手がかかりがどうもないらしい、ということを実感しています。つまり私どもの社会心理学者たちは、少なくとも内輪で考える限りでは脈々と積み重ねているはずのさまざまな、うまくすれば社会に還元できるはずの研究成果を十分に社会的に共有できていないのではないかと考えるわけです。

例えば、先ほどの私とメーカー企業とのコラボのきっかけというのも、企業側の担当者の方が大学院生のときからの知り合いで、長じてあちらがメーカー企業の人になり、私がこちらで研究者になった、といったような縁、つまり本当にごくパーソナルなネットワークの中に出てきたものなのです。たまたま相手が身近にいた、ということなんですね。もちろんたまたまであれ、結果的にそうできたというのは、それまでのそれぞれの積み重ねがあってこそなわけなんです、それだけでいいのか？と思っています。つまり、いるかもしれない相手に、自分たちの成果をちゃんと知ってもらうための努力が足りないのではないかと、ということです。こちらが適切な手がかかりを提供できていないのではないかと、考えるわけです。

一方で、情報工学の方とコラボをするということは、私

どもにとって非常にメリットが大きいです。卑近な例になってしまいますが、研究の範囲を「売り物」の機材やソフトウェアを使わないとできないものに限定しなくてもいいということがあります。仮にやりたいことが実現できる「売り物」が世の中になくても、かれらがつくってくれるかもしれない、ということです。「やりたいけどできへんなあ」という理由で、せっかく思いついた研究テーマの推進をあきらめること、結構あるんじゃないかと思いますが、そんな時にコラボが力を発揮することがあるわけです。私の目から見ると全然そんなの簡単なことであるかのように、いや、ひょっとして簡単じゃないのかもしれませんが、測定機器やツールをつくってくださったり、「ああ、そういうデータ処理が必要なんですか。じゃあ、こういう情報を切り出してこうしましょうか」と、それを実現してくださったりします。

もちろんそうやって私たちが情報工学の業界に打って出ていったとしても、ひょっとして「何と心理学者はしょうもないことしかできへんのか」と思われるかもしれませんが。しかし、もしそうであったとしても、われわれの研究の理論やその実践に対する外部評価を得るという意味においても、他領域の方とコラボレーションすることはとてもまたとない機会になるのではないかと考えるわけです。

しかし、先ほどから再々申し上げておきますとおり、われわれがなかなかそういう接点というのを作り出せていないという現実があるのではないのでしょうか。このことを確かめる一つの手段として、今回の合同大会にエントリーされた545件の学会発表の中で、心理学とそれ以外の分野、特に企業とのコラボ研究とみなせそうなものがどのくらいあるかを調べてみました。調べてみたと偉そうに言いましたが、これは私の業務のお手伝いをしてくれるアルバイトの子が数えてくれたので私がいちいち数えたわけではありません。具体的には、545件の発表の中で次のようなものがいくつあるかということ数を数えたわけです。単独発表で大学所属ではない方が発表しているもの、連名発表で責任発表者が大学所属ではない方のもの、連名かつ責任発表者以外に大学所属ではない方が含まれているもの、などです。もちろん大変雑駁な数え方ですし、ほかの年度との比較もしていないのですが、現状の大体の傾向は見てくると思います。結論から言うと、コラボ研究とみなせるようなものはごくわずかで、非常に少なかったです。少なくとも今回の学会の大会では、コラボ研究的な発表はほとんどなきに等しかったと言えます。

この結果をもって「ほとんどの社会心理学者はコラボ研究などしていない」と結論づけるつもりはありません。というのも、今回の大会の発表資格には、先ほど申し

上げたようなコラボの実践について、仮に発表できる素材をもっていたとしても、それを発表しにくくさせるような制約があったからです。具体的にそれは何かと言えば、連名発表者も正会員でなければならない、というルールです。その研究に主体的に関わった人々が皆、日本社会心理学会、あるいは日本グループ・ダイナミックス学会の会員でなければ発表できない、ということです。有り体に申し上げると、そういうルールはいかがなものか、と思うわけです。私は、本日例に挙げたものだけではなく、いろんなパートナーと学際的なコラボという形で共同研究をしておりますので、非会員は連名発表者になれないということが分かったときは、目の前が本当に真っ暗になりました。実際夜だったので物理的に真っ暗だったんですけど、心理的にも真っ暗な気分になりました。学会としてちょっとそれはどうかな、と痛切に感じました。

ここまでお話ししてきたことを簡単にまとめます。社会心理学は、コラボのチャンスがすぐそこにあるような学問です。そして、われわれ社会心理学者にとって、コラボをするということは、研究の発展を生む大きな手がかりになるはずで、一定の類似性を有した人々のもつ多様性のぶつかり合いが、非常に大きな創造的成果を生む可能性が高い、ということは、手前みそですが私どもの研究で提出されたモデルが示しているとおりです。実際に、例えば情報工学分野であれば、すでにその中でわれわれとのコラボであってもおかしくないような研究が多くなされているわけですから、コラボのシーズはいくらでもあるはずで、しかし、なかなかできていないという現状があります。

なぜそうなのか、ということ考えたときに思い浮かぶのは、われわれがコラボの相手となりそうな人に知られていない、という現状です。われわれは「社会やその構成員たる人とは何かを知る」ことを目的とした学問分野の一員であるわけですから、そういうアプローチをしているということ、ないしはそのことが社会生活の質の向上にとって重要な意味をもち得るということをもっとたくさんの方によく知ってもらうために、あるいは、どれくらいの意味を実際もっているかについての評価を求めるために、前向きな活動をすべきではないかと思っています。

最後に、たとえ話をします。われわれの業界というのは、たとえば言えば「ピン芸人」、つまり、自分の持ち芸やキャラクターを武器にしてのし上がっていくことを目指すような個人の集合体ではないでしょうか。たいていのピン芸人はどこかの芸能事務所に所属していて、その事務所の力によっても売れるか売れないかが決まります。しかし中には、非常に有能なピン芸人もいて、こ

ういう人は別に所属事務所がサポートしなくても自分だけの能力でのし上がっていった、いつかは独立して個人事務所を構えることになるかもしれません。そういう人はどういう環境になっても芸人として生き延びていけるでしょう。しかし、芸能事務所の方はどうでしょうか。いくらよいピン芸人を抱えていたとしても、かれらが独立していくようなことが続いてしまうと、事務所の力がなくなり売れないような芸人ばかりが残ることになり、その芸能事務所の地位は低下してしまうでしょう。抱えた芸人たちを売り込む力も弱まってしまえば、芸人も事務所もジリ貧です。ということは、芸能事務所の方も、爆発的に売れるピン芸人の登場に期待し、それに寄りかかるだけではなく、一生懸命に組織としても努力をしなければならないのではないかと思います。もうおわかりかと思いますが、そうした芸能事務所にあたるのが、日本社会心理学会であり、日本グループ・ダイナミックス学会ではないかと私は考えています。学会が率先して何らかの形で私たちの研究をさまざまな方に知っていただくための手がかりを、もっと今以上に、積極的に提供する努力をする、ということが必要ではないかと常々考えている次第です。

本日は、こうした話題提供をさせていただく機会を与えていただきまして、どうもありがとうございました。また、ご来場のみなさま、ご清聴ありがとうございました。

#### コメント

指定討論者の先生方、そしてフロアの皆さん、ご質問どうもありがとうございました。ご指摘いただいたことには私もうなずけるところが多く、お答えするとすれば「そうなんです」という一言になってしまうものが多かったのですが、いくつかのご質問について、私が今思いついた限りのことをお話しさせていただきます。

まず、永田先生からは、コラボから何が心理学にフィードバックされるのかということと、コラボはあなたの草刈り場ではないか、というご指摘をいただきました。

確かに、私も草を食まないと死んでしまうかもしれませんが、草刈りをしているとわれわれが見えてしまう部分はあるかもしれません。ただ、単に自分たちの草刈り場を求めてコラボをするというのではなく、自分たちの理論を実践の場にもっていくことで、先ほど吉田先生のご発言の中にもありましたが、それに対する問い直しのようなものができるのではないかと考えています。それは、必ずしも「私たちの研究」という狭い意味だけではなく、心理学というものに対する問い直しにもつながり得るのではないかと考えています。

また、じゃあ、そもそも心理学は社会に発信すべき内容をもっているのかどうか、ということについては、正直申し上げて永田先生にそのようにおっしゃれますと、

私にはもう返す言葉がございません。本日の私の話題提供は「ある」というのを暗黙の前提のようにしていましたが、そう思い込んでいて実はないのかもしれない、とも思います。ただ、じゃあわれわれが発信すべき内容をもっているのかどうか、ということを社会心理学の中だけで議論していると、分からないこともたくさんあるのではないかと考えています。コラボという形の中で外部からの評価を得ることで、それをちゃんともっているのかどうかを知る手がかりが得られると思いますし、それがわれわれの心理学という学問に対する問い直しにもつながるのではないかと考えています。

また、吉田先生からのご指摘の中で、方法論に代表されるような基本的な知識をきちんと身につけてからコラボの現場に出ていくべきではないか、というようなご指摘がありました。私も理想的にはそうあるべきだと思っておりますし、学部ないしは大学院の教育の中ではそういうことを非常にうるさく言っているつもりであります。私自身も、自分が心理学者として他分野の方々と接するに足る人間であるかどうかを常に意識し、そうであるように努めているつもりです。ただ、それこそが非常に大切だからちゃんと身につくまでは、と思って腕を撫している間に老兵になってしまっても仕方がないと思います。どこまで、という程度の問題は難しいですが、実践しながら学ぶ、ということもあろうかと思いますし、そのことによって自分の足りない部分に気がつく機会も得られるかもしれません。もしチャンスが得られるなら、とりあえずはそれを逃さずに適宜外に打って出てみることも大事なのではないかと考えている次第です。

加えて、苦い経験をしたエピソードがあれば、というお話でしたが、これについては、おっしゃっている意味で苦いということになるかどうか分かりませんが、私の

共同研究しているような分野では、心理学と比べて論文のような形でアウトプットを出すペースが非常に早いので、早く評価してください、早くデータを出してください、早くやってくれないと、みたいなことがあって、それがなかなか私どもの業界の時間軸のもつ、ややあきれるくらいのんびりした流れに慣れきっているとついていけないということがあったりします。それで苦労したような経験はございます。

それから、フロアの方のご質問の中でコメントできることとすれば、コラボをという依頼が、心理学者に対する見当違いの期待に基づいたものだと考えられるもののような場合にどうするか、というものがありませんが、これは、見当違いだと答えるためには、ここが見当ですよということを知らなければいけない、ということに通じると思いました。こうしたことを知るためには、吉田先生がおっしゃったような基本的なところをきちんと本人が踏まえているということが大事だろうと思っています。ただ、その見当というのがあまりにもピンポイントの、10点しか獲得できないアーチェリーの的のようなものになってしまうとそれはそれで困ります。バランスは難しいところだとは思いますが、そういうきちんとした認識とはそもそも何かということ、ある程度われわれが共有できればよいのではないかと思います。

### 引用文献

三浦麻子・飛田操 (2002). 集団が創造的であるためには 集団創造性に対する成員のアイディアの多様性と類似性の影響 実験社会心理学研究, 41, 124-136.

## 社会心理学のアイデンティティを何に求めるか 話題提供者の問題提起を受けて

永田良昭(学習院大学)

指定討論者という立場で発言をさせていただきます。その前に、山口、小口、三浦各先生がお話くださったことの最も核心的な部分をごく簡単に要約して私が誤解の上に立って議論するのかどうか、それをちょっと確かめておきたいと思います。

山口さんがおっしゃったことは、基本的には、もっとこの日本の研究者が国際的な発信力をもつべきだということが一つと、その背景となると思いますが、無国籍の社会心理学ではなくて、文化に根差した自分たちの社会心理学を確立していったそれを発信していく必要があるんだというご発言だったような気がいたします。違っていたら後でコメントしてください。

小口さんのほうは、いろいろ多面的なことをおっしゃったと思いますが、社会心理学のユーザーといいたほうがいいか、消費者というか、お客様というんでしょうか、それを見極めて、そのニーズに応えるような研究活動をする必要があるのではないのかと、ごく簡単に縮めて理解させていただくとういうことをおっしゃったような気がいたします。三浦さんのほうは、特に異分野の研究者とのコラボレーションの重要性ということをおっしゃったような気がいたします。しかし、そうやってしまっているのかどうかすこし迷うところがあります。その理由は、コラボレーションは、結局三浦先生の研究データの草刈り場として位置づけられているのかという気がしたためです。そうすると、それは一般論としてコラボレーションの必要性を主張されたと理解をしていいのかどうか、ちょっと気になりました。違っていたら後でご発言いただきたいと思います。

いずれにしろ、私はこの三人の先生方のご発言には、基本的に異議はありませんというか、まさにそのとおりであろうというふうに思っております。ただそれでは議論になりませんので、あえて三つほどの質問と、そして最後には、広い意味での社会心理学というものが一体きちんとした独自の主体性と市民権をもたなくなってしまうんじゃないかという悲観的な感想を申し上げたいと思います。

どういふことかといいますと、発信力をもつということは、当然何を発信するかが問題でありまして、発信すべき内容というものがどのように具体化され、形をとっていくのかということです。これは先ほど申しました無国籍の社会心理学は駄目だということだと思いますが、その

具体像がその先ほどのお話だけでは見えにくいところがあるのではないかという気がいたしました。

小口さんのおっしゃる、ユーザーの期待に応えるというのは、多分短い時間でご発言になりたいことをまとめられたせいでしょうけれども、そうすると社会心理学というもののもつ自立性というか、主体性というか、独自性というものは一体どこにあるのだらうということが知りたくなりました。

三浦さんのご発言でも、先ほどちょっとご自分の草刈り場として位置づけられているような印象を受けたというふうに申しあげましたけれども、コラボレーションの結果として何を生み出そうとして、それが社会心理学にどのようにフィードバックされてくるとお考えなのかということとを少しご説明いただけるといいのではないかと思います。

つまりそれは発信するにしても、あるいは開かれたネットワークをつくるにしても、現在、社会心理学をやっていると考えている人たちがその発信すべき内容を本当にちゃんと持っているのかどうか、あるいはそのユーザーとなるべき人のニーズに応えるとしても、本当に必要な答えのできるだけのリソースを社会心理学者は持っているのかということに若干私は疑問を感じております。

変な例をあげてその疑問を申し上げますと、例えばこれは進化心理学のお話を山口さんがなさったのでついそっちを引いてしまうのですが、Renfrew(2007)という考古学者の発言ですが、先史時代の研究をしているイギリス人です。彼は認知考古学というものを 30 年くらい前から提唱しております。認知考古学と呼んでいることは何かというと、人類の思考形態がどのように発達してきたのかを取り上げるのです。つまり人の心は現在までの間にいろんな形で形成されてくるわけですが、その過程を先史時代の遺物、あるいは考古学的遺物を通じて研究しようということを主張している人です。

その人の著書を読みますと、社会心理学者に限らず、認知研究をしている心理学者も含めて、心理学者の研究は全く引用されていません。実は、一、二、触れていますが、それは役に立たないという形で触れられています。これが他分野とのコラボレーションにおいても実はそうなんじゃないかという気がしているというの

があります。発信すべき内容について、これだけのものがあるんだぞということが言えるのかどうか。実際にそれを発信したときに受け止めるほうが、それに対してニーズに応えてくれたと思ってくれるのかどうかということに、私はちょっと疑問をもっているということです。

それからもう一つは、先ほどの三浦先生のお話に関係しますが、仮に他分野との共同研究、コラボレーションが成り立ったとして、その成果がそれぞれのコラボレーションをなさった方のルートを通じて社会心理学の世界にどのように還元されているのか。これがどうももう一つははっきりしないように思います。はっきりしないという理由は、おそらく社会心理学の核となるべきものについてのイメージがバラバラであって、このようなインパクトが与えられたという話をもち出したとしても、その社会心理学ワールドの方々の受け取り方は、そんなことはもうとっくに分かっていることじゃないかと言う方もいるでしょうし、それは何の意味もないことではないかと言う人もいるでしょうし、そのへんを受け止める側の問題として、社会心理学の世界にどのようにフィードバックされているのかということをちょっとそれぞれの方のお話をうかがってみたいと思います。

実は今日お話が出たようなことは、日本社会心理学会の会報を古いところからご覧になりますと、もう繰り返し、繰り返し、皆さんから言われていた話でありまして、それがつまりいつまでたっても同じことが言われなければならないということは、結局、その活動の成果が共有財産としてフィードバックされていないからではないかと思います。その理由にはその他分野との共同研究をされた方々の成果が社会心理学ワールドの学会ではなくて、別の学会で、つまり共同された方の学会で発表することで、研究として完結してしまっていることもあるような気がいたします。そうすると、では、社会心理学の研究者の集まりというのは、一体どういうものを中心として求心力をもち得ているのかということが私としては気になることです。

### 引用文献

- Renfrew, C. (2007). *Prehistory: Making of the Human Mind*. London: Weidenfeld & Nicolson.  
(レンフルー, C. 溝口孝司(監訳) 小林朋則(訳)  
(2008). 先史時代と心の進化 ランダムハウス講談社)

## 研究者としての在り方、研究者教育の在り方、学会の在り方など に関して思っていること・思ったこと、あれこれ

吉田寿夫(関西学院大学社会学部)

私も永田先生と同じで、お三方の話題提供に関して特に異論があるというような思いはありません。そこでと言ってはなんですが、まずはお三方が触れていなかったことを中心に「あなたは話題提供者か」と言われてしまいそうな自己主張をさせていただいたうえで、議論をするというよりは、ちょっとした質問をさせていただければと思っています。

最初に大坊先生から、私について、方法論者だというような紹介をしていただきました。けれども、そういう側面とともに、私はこの10年くらい、小学校、中学校、高校などの教育現場で、「心のしくみについての教育」というラベルのもとに、「心理学の知見を直接子どもたちに伝えて、自己理解や他者理解の妥当化を促し、いろいろな意味での適応に役立ててもらおう」ということを目的とした実践活動をしてきました。そこで、そういった経験も踏まえたことを少し話させていただければと思います。

それから、失礼ながら今日のお三方もそうなんだろうが、私たちは自分がやってきたことの正当化につながるようなことを話してしまいがちだと思います。そして、それは私も同様であり、今から私がお話しすることにもそういう面が多々あるということをご承知おください。また、釈迦に説法的な面や、あえてネガティブ・シンキングをして、わら人形論法的に現状を批判するような質の悪い面が多分にあるだろうこともお許しください。

さて、まず最初に問題にしたいのは、やはり研究方法に関することです。ちょっと宣伝になってしまいますが、詳しいことは、先ほどのご紹介の中にありました「心理学の新しいかたち」という本と、「心理学研究法の新しいかたち」という本の、二つの本の中でいろいろ述べています。

では、具体的にお話していきます。山口先生は、お話の最初のほうで、「日本の研究の中には非常にレベルの高いものがあるにもかかわらず」という、浦先生のお言葉を引用されていましたが、確かにそういう研究もたくさんあるんだと思います。でも一方で、「これは主張とデータが大きく乖離しているんじゃないか」とか、「そもそもこんな問題を吟味してどうなるんだろうか」というような、ちょっと首を傾げたくるような研究も多々あるんだと私は思っています。そして、そのような現状には、研究方法に関する基本的なことが踏まえられていない、

しかもその多くが多分に無自覚に、ということが関わっていると思っています。言い換えれば、研究方法についての知識が不十分だということと、知ってはいるけれど実践と結びついていない、ないし、実践の場で活性化されるレベルになっていない、というような面があるんだと思います。

私の勝手な思いに沿って少しだけ例を挙げると、例えば、反証の重要性を意識して、自らの仮説や理論を危険にさらすような、マゾっ気をもった研究をどれだけしているのかというようなこと、こういうことは皆さん知っているはずだと思うんですが、実際に研究をしているときに、どれだけこのようなことを意識しているんだろうかと思っています。それから、尺度構成の甘さということも感じていて、アメリカで言われていることがなんでもよいわけではないですが、妥当性ということについてアメリカの学会で20年、30年以上も前から言われていた(もっともだと考えられる)ことが、今のわが国の研究でほとんどと言っていいほど踏まえられていないんじゃないかな、って思っています。妥当性の検証活動ということの大変さや、通常、構成概念を相手にしている私たち心理学者にとって妥当性の検証ということがいかに大事なのかということが十分に踏まえられずに、「安易な尺度が独り歩きをしている」というような面が現状にはすぐあると思います。さらに、相関的研究を行うときの変動因の問題、つまり、個々人の中で時間的・空間的に広がりをもったデータを採って、一人ひとりの心のしくみ・働きに迫るというようなことが行われているとは言えない現状や、共分散構造分析などの数学的に高度な分析に依存しすぎているんじゃないか、分析法の力を過大視しているんじゃないかといった現状など、挙げていったらきりがありません。それから、統計的検定にも今なお無批判に依存しすぎていると思います。それに、社会心理学の知見とか科学哲学の考え方なんかを研究で十分に活かしていない。特に、社会心理学的な知見としては、自動性・無意識性とか、期待効果、自己呈示、虚偽、選択的情報処理などというようなことについてのいろいろな知見を、研究をするときに私たちはどれだけ踏まえているんだろうか、というようなことを感じています。自分のことはさておいて、という感じがしますが。

それから、今日のお話の中にはほとんどなかったと



思うのが教育のこと、つまり、研究者教育の在り方に関することです。これも非常に意地の悪いものなんですけれども、6、7年前かな、ここでは大学名は出しませんが、心理学の研究者育成に重点を置いている主要な四つの大学で延べ130人くらいのマスター、ドクター、オーバー・ドクターの人たちを対象に統計の抜き打ちテストをさせていただいたことがあります。その問題とか出来栄などについては「心理学研究法の新しいかたち」という本の中で紹介させていただいていますが、新しいことを学んだり、昨日のシンポジウムであったようにほかの領域のことについていろいろ知識を得たりすること、これらが大事であることはもちろん言うまでもないんですが、もっと基本的なこと、私たちの先達が考えてきた、今私たちがわりと多く使っている、または、使うべきであろう基本的な研究法、それらが一般にしっかりと身につけられていないと思うんです。基礎をしっかり学ばないとその研究法の力の過大視になるとともに、学ぶことが面白くないはずなんです。ある新しいことを学ぶために必要な基礎知識が事前にあって、それとの関連づけをしていく中で「ああ、分かった」とか「あっ、そうか」となるはずなのに、手続き的なことの修得に偏った、面白くないはずの学び方をしているんじゃないかなって思うんです。

それから、「この分析法はなぜこういうふうになっているのか」とか、「こういうデータの集め方というのはなぜこうするのか」とか、「そうしないとどんなまずいことが起こるのか」とか、「これはどんなロジックで成り立っているのか」と、そういう意味理解が大切だと思うんですよ。当たり前のことを言っているかと思いますが、こういう意味理解をきちんとしないと、今日の小口先生のお話とか三浦先生のお話のように、実践の場に出たり、ほかの領域の人たちとコラボをするときに、おそらく、型を崩して、マニュアル的なやり方ではないやり方で研究をしていかざるを得ない面が出てくると思うんですが、そういうときに適切に型が崩せない、または、どう型を崩したらどんなまずい問題が起こるのかということがちゃんと認識できない、っていうような事態になると思うんです。そういうことで、意味の理解というようなことがもっと必要なんじゃないかなと思っています。勝手なことばかり言って申し訳ありません。そうは言っても、そんな話をこのまま続けますけども。

ここまでお話ししたようなことを考えると、これまで以上に学会として考えていくべき問題がいろいろあるんじゃないかなと思っています。例えば、教育心理学会では、最近、投稿される論文の質の低さということが編集委員会で問題になっていて、それに対してどう対処していこうかということについて議論がなされていますが、この

問題について私は、編集委員をやっている方々が「どのような研究または論文のどういう点の問題性が大きい」とか「査読をする際にどういう点を重視すべきか」とか「現状を変えていくためにはどうしていったらよい」とかなどといったことについてのご自分たちの考えを、ある意味、喧々諤々に主張し合い、議論する場を設けて、その議論の内容をほぼそのまま学会誌にでも載せるというように、匿名性は保ったほうがいいんでしょうが、そんな研究についての価値観に関わるようなことについてまでもっと積極的な発信をしていく必要もあるのかなと思っています。もちろん、意見を完全に収束させる必要なんかはないと思いますが。それから、私にとっての主たる活動の場である教育心理学会に比べると、社会心理学会とグループ・ダイナミクス学会では、ちょっと上から目線になってしまうかもしれませんが、研究法についての学会員の方々への啓発とか、または議論とかってというような企画が少ないように思います。さらに、当然のことながら、学会というものは学びの場であるとともに、切磋琢磨して、概念とか、理論、尺度などを淘汰していくための議論をする場だと思うんですけども、もうちょっとこのような意味で学会を戦う場にしていく必要もあるんじゃないかなと思っています。

それから、最初に申し上げましたように、私は教育現場での研究や実践をこのところ少しやってきたわけですが、そうしたときには私は、心理学を世の中に役立てようとするときには、いわゆる自然科学みたいに世の中にとって有用であろう「物をつくる」ということじゃなくて、そういったことも心理学でもあるんだとは思いますが、そうじゃなくて、ちょっとキザったらしく言えば、多くの人たちの心の成長を促すことに役立つような知を実証的に構築して、それらをうまく伝えていく、要は「ためになることの直接的な伝達を通して世の中での役に立つ」というような、そういう意味での活かし方をもっと目指していったらどうかってことを考えています。一般の人たちがもっている心についての素人理論、それへの問い直しを促して、自己理解や他者理解の妥当化を促していく。そういうときに有用になる心理学的知見をもっと発信していく。心理学が扱っている事象は、たいてい、私たちの日常経験と密接に関わっているものですから、今申し上げたような役立て方というものがすごくあり得るんだと思いますし、人間関係に関わることを主要なテーマとしている社会心理学の知見は、このようにときに特に有用になるのではないかなと思っています。これは自分がやってきたことと絡めたまさに手前味噌な主張ですけども、世の中全体を長い目で見て活性化させていくためには、心理学者が、治療という面からだけでなく、予防や開発といった面からも、教育の問

題に積極的に発言して、関わっていくことがもっとあってもいいのではないかと考えています。

それから、実践の場に出ると、価値についての問い直しを迫られます。例えば、「そもそも適応ってどういうことなのか」って。これは非常に曖昧な概念だと思えます。そして、このことに関連して、自分たちが現実の場に働きかけていることの副作用とか弊害といったことについて慎重に考えなければならないとも思っています。例えば、「目的に沿った変容が生じることがもしかしたら負の側面をもっているかもしれない、想定外の負の影響があるかもしれない」とか、「不適切ないし不十分な形で伝えることで負の効果が生じるかもしれない」とか、「全般的な影響だけでなく、一部のこんな人やこんな状況ではこんなまずいことが起こるかもしれない」とか、「近々の影響だけでなく、長期的な影響も考えなくてはいけない」とかって、そういうようないろいろな面から、価値に関わること、特に副作用とか弊害というようなことについて考えていく必要があるんじゃないかなと思っています。で、そういったことを、この後、質問に絡めていきます。

それでは、私からの質問をさせていただきます。

まず、山口先生に対してですが、「国際的な発信をしていく」とか「国際的な競争力を高める」ということ自体には異論はありません。しかし、その先についてどういうことを考えていらっしゃるのか、「何のために、何を目指して」というようなことについてのご自身の思いを学

生さんたちに伝えたり、そのようなことについて学生さんたちと議論したりしていらっしゃるのか、伝えていらっしゃる、または議論していらっしゃるとしたらどのようにされているのか、そもそも山口先生ご自身はこういったこと、言い換えたら、「よい研究ってどういう研究なんだろう」とか「私たち社会心理学者が目指すべきことは」などということについてどう考えていらっしゃるのか、というようなことを私としてはお聞きしたいと思いました。

それから、小口先生と三浦先生に対してですが、実践の場に出たり、ほかの領域の人たちと関わっていったりするとき、やはり価値の問題ってすごく大事になると思うんです。で、三浦先生のお話に関して言えば、主に集団創造性の高さの規定因を探っておられるということだったと思うのですが、でも集団創造性だけが求められる事柄なのか、集団創造性の追求がほかの面で弊害をもたらさないのか、また、小口先生のお話に関して言えば、実際に観光のことに関わる働きかけをしていく際に、その働きかけが同時になんらかの負の側面、特に長期的に見て負の影響がないのかというような、こういった価値的なことについてどんなお考えをもっているのか、ということをお聞きしたいと思います。また、実践の場に出たり、ほかの領域の人たちとコラボしていくときにこれまでに遭遇した苦い経験とか、それに対してご自身はどのように対処してきたのか、そんなことなんかも時間が許す範囲でお話しいただければと思っています。

## 会場との質疑・討論

司会者(大坊) 吉田先生、どうもありがとうございます。  
た。

今、それぞれの話題提供者はいろいろ答えたいとの準備で随分エネルギーが燃えているところではないかと思います。このまま、もしここで話題提供者に戻しますと会場との質疑の時間がなくなるのではないかと思いますので、未だそれは溜めておいていただきたいと思います。

ここで、会場の皆様方からどうぞ、どなたに対してでもよろしいですからご質問、ご意見等を出していただきたいと思います。そしてその後で話題提供者から答えていただきたいと思います。どうぞ、どなたでもよろしいです。遠慮なく手をあげていただきたいと思います。

はい。どうぞ。所属とお名前をよろしければお願いします。

会場(山口) すみません。目白大学の修士に所属しております山口と申します。手短に。

吉田先生のお話に出てきた中に、型という言葉が出てきました。日本の伝統文化であるとか、芸術、武術の中に、「守破離(しゅはり)」という言葉があって、守る、破る、離れると書いて「守破離」。そのようなある種の型を守り続けて、それを学んでいくという過程が社会心理学には存在するのかという疑問を常にもっておりました。

院に入学するときにも、自分のテーマは何なのかと。ある種、型から離れたところの、すでに破られているところでの知識を求められるという状態があり、自分の努力不足が一番の原因ではありますが、その型にあたる部分が何なのかということが分からずにもがいていることがあります。

そこで、社会心理学研究における基本、型とは何なのか、考えるところがございましたら伺いたいと思います。

司会者(大坊) はい。分かりました。後でまとめてお答えいただきますので。どうぞ。そのほかに、お願いします。

会場(野村) 龍谷大学の野村と申します。昨日のシンポジウム、本日のシンポジウム、双方非常に感銘させていただいております。実は私、工学の人間であります。

三浦先生がおっしゃっているようなコラボをこちらか

ら乗り出してやっていただいているという形です。その上で、あえて申し上げますと、この会と昨日、はっきり言って、私から言わせますと、今ごろ、何を言っているんだというのが正直な気持ちです。待っております、工学者は。情報も調べております。なんで、社会心理学の方々がもう少しこちらのほうを向いてくださるのかというのが、工学者の正直な気持ちで、これに関しまして皆様のご意見を伺いたいと思います。

司会者(大坊) はい。分かりました。

ほか、いかがでしょうか。時間を取らせていただきますから、どうぞおっしゃってください。よろしいですか。ああ。それでは、藤田先生、お願いします。後ろです。

会場(藤田) これはひょっとしたら大坊先生にお尋ねしたほうがいいのかも分かりませんが、追手門学院大学の藤田です。

一番頭にある「歴史」という言葉ですが、社会心理学にとって歴史とは何かということをご自分で結構です。から教えていただいたらありがたいと思います。

司会者(大坊) はい。分かりました。向こうのほうでどなたか。手を。一番後ろです。お願いします。

会場(田端) 大阪市立大学の大学院生の田端と申します。

社会心理学以外の領域の方とともに研究なり活動なりに取り組むにあたっては、先に述べられた、社会心理学という存在が知られていないという問題だけでなく、もう1つの問題があると個人的な経験から感じています。社会心理学に限らない、心理学に対する誤った固定観念が、共同研究や活動の障害になるように思ったことがあります。例えば、他領域の方がある期待をもって話をもちかけて下さっても、その期待が見当違いという場合も実際にありうかと思えます。そのときに、それは見当違いの固定観念だからとお断りするのではなく、その固定観念を解きつつ、社会心理学の専門性を生かした新たな提案をするような、ある種のコミュニケーション・スキルやソーシャル・スキルのようなものをもっているといのではないかと思います。

特に、相手が信じている誤解を相手に配慮しつつ解くといった技術をどのように培えばよいのか、実際に他領域の方と共同で活動されている先生方におうかがい

したく思います。個人的な心がけや努力によって培うべきであるのか、それとも組織的にスキルを鍛える何かを提供するべきと考えられるのか、お答えいただけたらありがたいと思います。

司会者(大坊) はい。ありがとうございました。ほか、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

所定の時間ではあと 14 分ぐらいなんです。最初に申し上げれば良かったんですけども、実は今、これは動画記録をしております、学会のホームページから後に動画配信させていただく予定になっております。そこであらためてご視聴いただけますことをお知らせしておきます。

それと同時に当研究室で出しております雑誌、「対人社会心理学研究」に、この記録を編集の上、掲載させていただくことにしております。そこで、ここでの発表 + コメントを入れる余地を残しております。

それではいくつか、今、4 人の方々のご指摘がありました。どなたへのコメントでもということに進めましたが、人を特定されたものもありますけれども、先ほどの指定討論の先生方お二人からの指摘も踏まえて、3 分ずつくらいですね、お願いをしたいと思います。非常に時間の厳しい状況ですけども、よろしくお願いいたします。

山口 なるべく手短にお話しさせていただきたいと思います。

まず、永田先生からのコメントですけども、先生がご理解いただいたとおりでいいと思うのですが、特に何を発信すべきかということについて、私、そこまで話す時間はなかったんですけども、聞いていただいたのでお答えしたいと思います。

要するに、究極的にはわれわれは実践を目指すべきだと思うんですね。社会心理学は基礎科学では私はあり得ないと思っています。進化論の話をしたので進化論一つとっても、何が正しい進化論なのかって、われわれ決めることはできない。どの進化論が好きかというのは、自由に決められるし、どの立場の進化論に基づいて自分の研究の前提を置くかということもできるけども、人間を相手にした研究の結果からどの進化論が正しいということを確定することは僕はできないと思っています。

エビジェネックスの研究成果はこれから一体どうなるか。われわれがそこに入っていって、おそらく研究できる人はいないだろうと。そうすると、やはり社会心理学が社会心理学として成り立つためには、やはりこれ、実践的な貢献をする以外にはないだろうと思っています。

それは先ほどお二人の方々がおっしゃっていたとおり、ほかの分野との協力で社会貢献するというようなことも含めて、われわれはいわば、最近 Evidence-Based Medicine という言葉がはやっていますけれども、Evidence-Base Social Practice を提供できるように究極的にはならなくちゃいけない。

私はまだ何もしていませんが、私が思っているのは、それは理論的なきれいな研究いい、方法論的にきれいな研究いい、結果もきれいな結果を出せばいい。だけれども、やはりそれは最終的には実践に結びつかなくちゃいけない。それをじゃあ、どういうふうにしてやったらいいかというのをこれから考えていかなきゃいけないというふうに個人的には思っています。

ですから吉田先生に対するお答えにもなるんですけども、研究法の基礎が不足しているというのは非常に頭の痛い問題で、先生がおっしゃるとおりだと思うんですね。これはやはり日本の大学は多くの若手メンバーを抱えられる余地がないので、今、もうどんどん人を減らす方向に向かっちゃっていますので、これはそれぞれの大学に吉田先生のような先生がいて、教育してくれるのが理想的なのですけども、そうもいかないの、やはりこれは学会レベルの取り組みが必要だと。

特に統計的な手法はどんどん進歩していくわけですね。例えば、マルチ・レベルアナリシスなどを使えないと、やっぱりグループ・レベルの分析をきちんとできないということになるわけですね。これは、ただその勉強しなさいというのはやさしいけれども、そのモデルが複雑になってきているし、ソフトの使い方もきちんと勉強しなくちゃいけない。これをそれぞれの大学の、あるいはもっと小さい研究室でちゃんと教育しなさいと言われてもなかなか実際問題としては無理だろうと思う。そうするとやはり学会レベルの取り組みというのは必要になってくるだろうというふうに思っています。

ですから、そういった本当の意味でのワークショップのセッションを学会の前、あるいは後につくって、院生とか、若い人たち、僕らも勉強したいことがたくさんありますけども、そういう人たちに安い費用で参加できるようにすると、非常に重要だろうというふうに思っております。

司会者(大坊) では小口先生、お願いします。

小口 吉田先生と永田先生からご質問いただいたのですが、まず、吉田先生のほうで、価値観が大事になってくるだろうというお話だったのですが、まさにそのとおりだと思っています。ただ一つ、誤解があっはいけないのは、観光というと、物見遊山というイメー

ジがあるのでどうしてもネガティブなイメージをおもちゃかもしれませんが、現在のところでは、サステナブル・ツーリズムというのが主流になってきていますので、ちょっと従来の観光というイメージとは違うものになっているということをご承知ください。

それから、何か、苦い体験がありますかという点ですけど、別に苦い体験はありませんが、一つは、社会心理学の業績にならないということが大変なことと、もう一つは、もう体力的に大変です。しんどいです。もともと体力がないので、朝、自分の家から出かけて、羽田まで行って、飛行機に乗って、向こうに行って、向こうで会議とか打ち合わせをして、夜こっちに帰ってきて、次の日、講義でとか、そういうのがやっぱりちょっとしんどいかなという、体力のない人にはちょっと、私なんかにはちょっと厳しいなという思いがあります。

それから永田先生のご質問なのですが、永田先生は学会の会長もやっていらしゃったので社会心理学会を大事にされるというのはよくわかるのですが、そんなに社会心理学会、社会心理学会と言わなくてもいいんじゃないかなという、そういう安易な発想があります。社会科学が発展していくことが大事なんじゃないかなというふうに思っています。

けれども、その一つとしては、逆に社会心理学会のほうでやっていくことによって、その社会的な注目とか、支持をいただいて、それによってさまざまなサポートをいただける。それによって、何ができるかというと、実践研究とか、応用研究だけでなく、基礎研究さえもすごく充実できるはずなので、そういった基礎研究こそがやっぱり基本とか、バックグラウンドになるものなので、そういったものを強化できるという意味で、非常に大事なんじゃないかと思います。

それから発信すべき内容がないんじゃないかっていう杞憂をなさっていたんですけど、そういうところがないわけではありませんけれども、現実の問題を抱えていらっしゃる方たち、何かの問題のある方たちと一緒に考えていくことによって、それにどうしようと考えていくことによって、そこから出てくる知恵とか、知識とか、知見とかいうものもありますので、そういう共同作業を通じて新しい知恵が出てくるんだと思います。

それからどうフィードバックしていくのかというところでは、まだ十分できていませんけれども、少なくともその異分野の領域の学会誌には載せていますので、そういうところで貢献していますから、それをしばらくお待ちください。もう少し待っていただくと社会心理学の本体のほうに還元していきたいと思っています。

司会者(大坊) はい。ありがとうございました。

三浦先生、では申し訳ないですけど手短に、お願いします。

三浦 手短に。はい。分かりました。

指定討論者の先生方、そしてフロアの皆さん、ご質問どうもありがとうございました。ご指摘いただいたことはいちいちもっともなことが多くて、そうなんですというふうに申し上げるところが多いのですが、いくつかだけ、私が今、思いついた限りのことだけお話しさせていただきます。

まず、永田先生がおっしゃってくださった、何が心理学にフィードバックされるのかということと、草刈り場ではないのかというご指摘をいただきました。草も刈っているといます。で、私も草がないと死んでしまうかもしれないので、草というものはあると思うのですが、そういうふうなものだけではなくて、やはりそういうところで実践の場にそういうものをもっていくというふうなことで、先ほど吉田先生のご発言の中にもありましたけれども、それに対する問い直しのようなものができるのではないかな。そういうものが得られるのではないかなというふうに思っています。そのことは、もちろん私たちの研究とかいうふうな狭い意味のことではなくて、やはりその心理学というものに対する問い直しというふうなことも得ることができるのではないかなと思っています。

また、じゃあ、そもそも発信すべき内容をもっているのかどうかというふうなことについてですが、私はその正直申し上げて永田先生にそのようにおっしゃられますと、もう返す言葉がないというのが正直なところなんです。やっぱりその、じゃあ、発信すべき内容をもっているのかどうかというふうなことを社会心理学の中だけで議論していると分からないこともたくさんあると思っています。あると思ひ込んでいて実はないのかもしれないとも思います。ただ例えば、そういうふうな形で外部からの評価を得るということで、それをちゃんともっているのかどうかということを知る手がかりが得られると思いますし、そのことからわれわれのその学問に対する問い直しというふうなこともできるのではないかなと思っています。

それから、吉田先生からのご指摘の中で、一つは基本、例えば方法論とか、そういうことをきちんと身につけていないと、というふうなご指摘がありました。それは本当にそうだと私思っておりますし、学部ないしは大学院の教育の中ではそういうことを非常にうるさく言っているつもりであります。私もそれはずっと大切だと思っています。ただ、それは非常に大切なのでそれを身につけるまではというふうには思っ腕を伏している間に体力がもたなくなって外に出るものはなかったと、老兵にな

っていてはそれは仕方がないと思いますので、やはりそういうふうなことも考えながら適宜外に打って出るというふうなことは大事なんじゃないかなというふうに思っている次第です。

また苦い経験というふうなお話でしたが、これは、苦いというふうなことかどうか分かりませんが、私の共同研究しているような分野のところでは、心理学と比べて非常に論文のようなもののアウトプットを出すようなペースが早いので、早く評価してください、早くデータを出してください、早くやってくれないと、みたいなことがあって、それがなかなか私どもの時間軸の流れとついていけないというふうなことがあったりして、苦労したような経験はございます。

それからフロアの方のご質問の中で、お答えできることとすれば、見当違いだというふうな事になったときにどうするかというふうなことがあったと思いますが、見当違いだというふうに答えるためには、ここが見当ですよというふうなことを知らなければいけないということなので、それは一つには吉田先生がおっしゃったような基本的なところをきちんと本人が踏まえているというふうなことが、もちろん一定のところでは大事だろうと思っています。

ただその見当というふうなものをすごいピンポイントの10点しか獲得できないアーチェリー的みたいになってしまってもそれはそれで困ると思うので、バランスは難しいところだとは思いますが、やはりそういうふうなきちんとした認識みたいなものをある程度われわれが共有しておくというふうなことができれば、ある程度はよいのではないかとと思っています。すみません。長くなりました。

司会者(大坊) どこかで時間の合図がありましたのですけれども、このシンポジウムあと数分だけ続けます。

コラボに関しては、今随分フロアからも出しましたのですけれども、当然こちらにある、もっているものがないとコラボにならない。そうすると、その相手からは草刈りになってしまうわけで。だからそういう意味でのそれぞれの領域での蓄積と、それから当然コラボするためには柔軟性がなければならないと、抽象的に申し上げますと、私も最近では情報科学とか、それから化粧科学関係とは随分長くコラボレーションをやっておりますけれども、それぞれのものがないとお互いに期待に応えられないということがあります。

フロアの方々からいろいろご指摘があった点であまりまだ触れられていないものが多々ございます。型の問題に関して言いますと、例えば、「自分は、社会心理

学を研究している」というふうに、私も必ずしもそう厳密に規定する必要はないだろうと思っています。社会というものにかかわって、その発想およびあるいは結果に、その蓄積に、成果に出てくるものがあるということがやはり型なんだろうと思います。非常に抽象度が高いことです。つまり、心理学、社会心理学では、私はそんなに狭い意味での特定の何か伝統工芸の中の技術系の型などというものとはちょっと違う趣旨のものなのだろうと思っています。

それから、多くの領域では「ほかの科学とのコラボレーションを待っておられる、それは当然のことである。」。そのご指摘はやはり分野によるんですね。分野によっては、全然社会心理学を相手にしない部分もあります。特に情報科学との関連。私自身もコミュニケーションのを中心に行っておりますけれども、それがすごく待たれているということをよく私も切実に感じております。それに応えるだけの、こちらがもって出するための蓄積がないとならない。貢献できる部分もきっとあるのではないかと私自身は思っております。

それから藤田先生の歴史というのは、狭い意味と、広い意味とがあると思います。発想としての意味です。狭い意味では、本大会は、50周年記念ということもありますが、社会心理学のこれまでの研究の歴史があるわけです。その研究、これまでの研究ということを本当にわれわれはしっかりと踏まえて、次のステップを踏み出しているのかということを反省しなければなりません。これは、社会心理学会の会報にも随分これまでも何度も指摘されていることです。これは永田先生もご指摘がありましたのですけれども、何か、目の前のことしか、近未来しか見ていない研究者が少なくないと思うことがあります。その長い歴史とそして、それを踏まえたこの先の長い見通しがもっともてるならば歴史というのはおのずと創られてくるものだろうと思っていますが、今、十分な時間がないので、後に冊子にまとめるときにそれなりのコメントをさせていただきたいと思います。

ほかにもまだ答えられていない部分があると思いますけれども、今までのこの議論を踏まえさせていただいて、あとでこのシンポジウム企画というものを論文文化して、皆様方にお届けしたいということをお約束させていただきたいと思っています。

それから、本大会委員会関係のことですが、先ほど準備委員でもある三浦先生から言及がありましたが、大会発表の資格については、学会の基本方針を踏まえてそれぞれの大会準備委員会でアナウンスしております。非会員の発表を認めるかどうかの基本方針は、学会レベルが決めることであります。今回、両学会の共同であり、それぞれの学会においては非会員をオーブ

ンに参加するという規定にはなっていません。ですので、それを踏まえて、今回も発表資格条件は踏襲しております。今回だけ異なる対応をしている訳ではありません。なお、今後、学会理事会で検討していただきたいことのひとつと思います。それを常任理事会にお願いしております。それによって解決する問題です。毎年の大会準備委員会レベルの決めることではないというのがわれわれのスタンスでございましたので、改めて、ご理解いただきたいと思います。

それでは、十分な消化ができていない部分もわれわれにも、皆様方にもあるかもしれませんけれども、そういうことを踏まえて、しばらくお待ちいただいた後、雑誌の活字体として、および学会の HP での動画記録をお待ちいただければと思います。

それでは、改めまして今日のご発表いただきました先生方に感謝の意を込めて拍手でと思います。どうもありがとうございました。(拍手)



## 社会心理学の研究を今後につなぐためになすべきことは何か 研究の目的と継承

大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

その研究が人間にとってどのような意味をもち、価値をもつのかは常に考えられなければならない。現状では、功利的な目的のために、人間の尊厳を軽視した研究やその質よりもアウトプットすること自体を競うかのような断片的な研究、あるいは、自己満足的な姿勢がみられることもあるが、それは科学倫理を損なうものである。

社会心理学が中心となって考えるべき対象自体は固定ではなく、変化する可能性をもっている。つまり、研究方法の工夫が対象や時代に応じて常に吟味されなければならない(大坊, 2007)。さらに、社会心理学は、人が構成因となる集団、歴史的な文化を有する社会を研究対象としてきた。元来、その対象は広域で、ほかの領域との重なりをむしろ特徴とする科学である(大坊, 印刷中 a)。

行動の法則、他者との相対的な心のダイナミズム、個人の心の集積としての社会が問題になる心理学においては、well-being のための科学であることを後に続く者に、今よりも明確に伝えるべきであろう。すなわち、目指すべき価値をどこにおくのか、その研究は、われわれの適応、幸福を追求する科学、研究であるということを明らかにし、個々の研究がどのように貢献できるのか、そのために具体的にはどのような価値を目指すのかを問い続けるべきである(大坊, 印刷中 b)。

どのような研究であれ、その研究の先に目指す価値は何か、研究方法の質(その成果がわれわれにとってどのような価値につながるのか)を熟考した綿密な計画を立て、真実の追究と人間にとっての福利が考えられていること、個々の研究の具体的手順として参加者への配慮などが十分になされているのかなどを明確に追究しなければならない。そして、研究の結果から何を、どこまでを読み取るのか(その結果を well-being 向上に生かせる工夫)などは重要である。研究者がそれをどのような文脈で検討し、何を主張したいかが問われる。

例えば、公共交通機関の場面において、優先座席が高齢者などに優先されていない、列に割り込む人がいることをなんらかの得られたデータを統計的に分析して示す際に、なにがそのような行動を促しているのかなどの条件の追究、さらに、どうすれば、向社会的なルールを遵守できるのかについて考えられるような文脈

がしっかりと示される必要がある。

われわれは、好むと好まざるにかかわらず、他者との相互作用を結び、多くの人間関係を築いている。それぞれの相互作用において、自分を表出し、相手の意図を読み取り、共通項を確認しながら自分の考えや行動を調整している。そして、われわれは、家族、近隣・地域、学校、職場などの集団や社会的広がりの中で多様な価値観に触れ、相互に吟味しながら自分の目標を設定し、生活している。

誰もがア・プリオリに自分の人生に一定の規範を課せられているわけではなく、生き方を選択することが可能である。ただし、あらゆる事柄に自由であることはなく、生き方の選択にも多くの前提があることも大方は知っているはずである。

ここで特に指摘したいことは、“他者”との相互作用の蓄積がわれわれの社会性を築き、そのプロセス自体が社会を構成していることにある。すなわち、日常的な事実として、あるいは、仮想的なものであれ、他者との関係が考慮される限りにおいて、「社会」は意味をもつということである。大方にとっては、このような説明は不要であり、暗黙知として社会は成立している。しかしながら、この「社会」は、決して明示的、共通理解の概念ではないので、具体的な科学的操作においてぶれを生み続けてきている。どのような科学においても同様なぶれの歴史を背負っていると言える。

科学的研究の役割は、研究対象とする現象にどのような要因が関係しているのかを特定し、それらの要因がどのような形で作用しているのかを詳細に検討することにある。この過程で数多くの要因が抽出されていくにつれ、拡散する要因間の関係を明確に結びつけることが次第に困難になってしまいやすいものである。

とりわけ、因果の作用のメカニズムは容易には定まらないことが多いものの、その追究の試みは中断できない。それが、後の者が参照できる歴史となる。

具体的な研究作業として、明示的な議論を生むためであることを意図するためにも、ピンポイントな部分的な成果が求められ、示されやすい。しかしながら、特定のこうして細分化された研究の成果は、日常の人間行動に適用されることが可能な限り、試みられ、部分をつなぎより全体的な人間像、社会が再構成されなければならない。近年では、このような要因総合 - 全体性 -

への関心が高まってきている(well-being を目指す人間像を扱い研究、さらに広げて、ポジティブ心理学の試みなどはその例である; 大坊, 2009 参照)。

Well-being は、多元的な要因によって形成されるものである(堀毛, 2010 など)。それぞれの要因は横並びになるような同レベルのものではなく、個人や文化に応じて要因の優先され方は異なると考えられる。生き方、生活の価値観などを十分に勘案した検討が必要であろう。自然との共生、自己と他者の連続性、人生の歴史性を踏まえた霊性(spirituality)、文化特異性と文化共通性などは今後、重要なテーマになる。なお、近年では、環境の捉え方はある意味では急速に主体化してきている。例えば、アンビエント(ambient)情報社会という発想は、この例として挙げられるであろう。これは、ユビキタス社会の次に来る情報社会として考えられている。ユビキタス社会は、「いつでも、どこでも、何でも、誰でも」をモットーとして、情報の手がかりを容易に得やすい情報環境を目指していた。それに対して、アンビエントというのは、アンビエントとは、英語で「周辺の」、「取り巻く」とか、「環境の」といった意味をもつものであり、いわば、人を取り巻く環境自体に、情報手がかりを組み込み、人と環境との一体化を高度に推進する、そして、その結果として、人間の周囲、環境のあらゆる場所にコンピューターやIT 機器が存在し、意識せずにそれらの機器を使える社会を考えているのである。ここで、使えるという意味も一般的なイメージを脱するものであり、人の手を経て組み込まれた仕組みではあるものの、意識して、選択してその手がかりを探索するのではなく、人がなんらかの感情・意図をもったなら、その心的変化に応じて、環境側から選択的に情報を提示するといういわば、究極の自動制御のインタラクションがなされるものなのである。この仕組みができあがる時点においては、もはや、「インタフェース」はないことになるのではなかろうか。この発想は、未だ部分的にしか実現していないが、早晚大きな進展を見るであろう。アメリカ映画の“Surrogates”(日本公開、2010 年 1 月)では、オペレーターである生身の人間は、自分の理想像として造られた身代わりロボット(surrogate)をすべての場面(私的な関係も職場での仕事も)での行動を自宅にいて脳回路とつないで操作する。生身の人間は極度の運動不足で、限られた空間でしか活動しないが、ヴァーチャルには、皆がスーパーマンであり、高度な能力をもっている(ように造られている)ので、疎外もない。この世界は、そのままアンビエント情報社会とはいいたい面もあるが、アンビエントな環境をどう工夫していくのかのヒントを与えてくれる。

アンビエント情報社会の発想は、明らかに、人対環

境という2項関係や、個人 - 関係 - 環境などの3項関係を超越する思想が含みもつものであり、人工的な操作を行うという点が新しいが、環境と人間が一体化することを目指しており、これも「共生」の一形態であろう。共生のあり方も、テクノロジーの進展に応じて異なる様相をもつと言えよう。

Well-being をどう定義するのは、容易ではない。このことの基本は、当事者の人生の理想に大きく関わることであり、個々人によって描く well-being がそれぞれ異なる可能性がある。これをなんらかの基準によって分類することは可能でしょうが、個々人の主観を厳密にはまとめがたい。したがって、われわれができることは、まずは、個人差や文化差を前提としつつ、普遍的な意味と、個人や文化に特異的な意味を仕分けして整理し、それぞれの意味を主張し合う作業が必要であろう。その上で、普遍的な意味を最大限実現することを目指し、その作業の中で、個人、文化特異的な意味合いを再解釈、整理し直しながら、おおもとの意味の進展をはかることが必要であろう。そうすることによって、共有される意味は拡がり、ずれは少なくなっていくであろう。

冒頭に、Asch、Zimbardo や Latané の研究に言及した。その意図というのは、多くの知見を豊富に概観できる今日、なぜに、あのようなインパクトのある研究が登場しないのであろうか、ダイナミックに、多くの人々(研究者とは限らない)が生活のヒントを得たいという気持ちにさせるような魅力ある研究が少なくなってきたのかという疑問を共有したかったからである。

現在、多くの研究結果が世に示され、論文も増加している。個々の研究は、大方の評価者の目を経て、確かな成果として受け入れられている。

多くの模範とされる研究論文は、問題の所在(研究目的につながる研究動向のコンパクトな展望、目的・仮説(読みやすい)、方法、結果、考察(問題の所在、仮説とのみ結びつく)を「きちんと」書いてあり、そつがなく、まとまっている。しかし、人々の思考を刺激する、なにか読んだままでは通り過ぎられない研究(論文)にはなかなかお目にかかれないうに思われる(これが著者の杞憂ならいいのですが)。だからといって、個人的経験を記述するようなアプローチをよしとするものではない。一般性を問題にすべき事柄を、個人の体験として書き下すだけでは、一つの事例ではあっても、心理的事象の規則を形づくることにはならない。個人の特異性を並列的に扱うことはあっても、それをよりマクロに鳥瞰する姿勢がないと一般性は追究できないと考えている。

研究手順の仕方、手順を踏むことは大事であるのは

もちろんであるが、それだけではなく、さらに大事なものは、研究する心、精神であり、それは決してテクニカルに伝えられるものではないのです。研究者の姿勢に表れる、「醸し出される」精神なのである。おそらく、これこそが大事な後生への継承性である。それは、どのように伝えられるものなのでしょう。

例えば、Asch の印象形成の研究は、素朴な発想から始まり、大方の関心事を複雑な操作をすることなく、印象形成のいくつもの規則性を示している。あまりに日常的なことを些細な創造的な工夫で明らかにしたので、Zimbardo や Latané の研究も日常的な事柄をちょっとしたアイデアで工夫したものと言える。すべての科学研究を素朴心理学的な発想だけで展開できると言っているのではない。研究する動機、姿勢の「意味」を改めて大事にすべきと言いたい。

研究の仕方はいくつかの目的やスタイルがあっていいと考える。おもしろい研究、楽しい研究、理想に近づくための研究をそれぞれに目指してよい。基本的に研究はその当事者にとって快感情を生じさせ、楽しい、満足をもたらすはずの営みのはず。換言すれば、現在、大方にはこの誘因が乏しいのではないか。

研究を創造する、アイデアを生み出すためのスキルを磨くという「教育」がなされていない、換言するならば、研究の意義と楽しみを伝える機会が高等教育場面にはあまりに乏しいのではないのでしょうか。

なお、研究するためには、「歴史」が重要である。ここでいう歴史には、いくつかの含意がある。研究対象者(本来研究者自身も同じ枠内にあるのですが)の歴史である。人は、家族や家族以外の他人とのつながりの中で規範や価値観を継承している。それは幾世代どころではない、連綿とした時間の軸でつながっている。根本ではすべてがつながる共通性をもっているであろうが、実際には、時代や地域・文化に応じて異なる継承がなされているはずである。そのことを含めて狭く見るならば、個々人の人生という時間の歴史から考えてよいであろう。折々に一般性を把握できる参照ポイントがあり、舵取りの修正は可能である(社会的承認の欲求による他人との比較)。個別性、特異性を最大限に前提とした横断的な比較が可能ではあるものの、個々の価値観を尊重することが必要である。多くの研究が扱う歴史は、この種の個別性を横並びにして、狭い範囲の共通(一般)性を見つけ出そうとしているのである。

第二は、この個人の歴史を探るだけでは引き出し得ない、人間の歴史である。それは、遡れば、人類の進化、地域間の抗争、文化生成・派生、宗教の私立や宗教観の多様化などを含みもつ歴史である。この観点からすると、一時点で人間の行動を説明できるほどに問題は簡単でないことに誰もが気づくであろう。しかし、われわれ自身が必ず歴史のどこかの時点でしか研究できないのであり、相対的な考察を深めて軌跡を残すことが最善の解ではなかろうか。換言すれば、後世になるほど膨大になる、その軌跡を辿る作業を続けることであろう。

第三は、近過去(現代史)、現代、近未来への視点である。今、展開しつつある研究がどのような経緯でなされているのかを客観的に把握することが必要である。先に触れたように、個々の研究は、短期的には集中的な評価がなされ、先行研究や同時期のほかの関連する研究と照合され、なんらかの評価がなされるものである。それを真摯に受けとめ、使用可能な知識、情報を駆使して自らの研究を改善することが必要なのである。

歴史は、循環することも、途絶えることもなく、常に、一つの方向にしか動かない。ほかを損傷しない well-being を目指すことが長く続く歴史を生み出すことになる。

## 引用文献

- 大坊郁夫(2007). 社会心理学からみた臨床社会心理学 個人から社会へのつながりにこそ well-being を見出す 坂本真士・丹野義彦・安藤清志(編) 臨床社会心理学 東京大学出版会 pp. 214-228.
- 大坊郁夫 (2009). Well-being の心理学を目指す 社会的スキルの向上と幸福の追究 対人社会心理学研究, 9, 25-31.
- 大坊郁夫 (印刷中 a). 社会心理学授業 心理学教育研究会(編) 心理学教育の視点とスキル FD から SD へ ナカニシヤ出版
- 大坊郁夫 (印刷中 b). 社会心理学の将来 浦 光博・北村英哉 (編) 個人のなかの社会 展望現代の社会心理学 1 誠信書房
- 堀毛一也 (編) (2010). ポジティブ心理学の展開 現代のエスプリ, 512 号, ぎょうせい

## 註

本記録は、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会の3日目(2009年10月12日)に開催された同大会委員会企画のシンポジウムの記録をもとに編集したものである。会場からの質疑・応答については、その概略にとどめさせていただいた。また、お名前、所属等について齟齬がありましたら、ご容赦いただきたく存じます。なお、このシンポジウムでは、話題提供者として、山口 勸先生、小口孝司先生、三浦麻子先生、指定討論者は、永田良昭先生、吉田寿夫先生、企画・司会は大坊郁夫であった。

## How to develop future creative social psychology studies that are based on history

Susumu YAMAGUCHI(*Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo*)

Takashi OGUCHI(*College of Contemporary Psychology, Rikkyo University*)

Asako MIURA (*School of Humanities, Kwansei Gakuin University*)

Yoshiaki NAGATA(*Gakushuin University*)

Toshio YOSHIDA(*School of Sociology, Kansei Gakuin University*)

Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

Social psychology is a comprehensive science that encompasses almost all of the factors in the social environment. It uses an understanding of these basic factors to explore the principles contained in our real life events. Furthermore, it aims to provide people with ways to promote ideas on adaptive behavior in real life. Our goal is to build adaptive relationships with others, and we must commit to maintaining a mutually cooperative society, i.e. social well-being. Everyday episodes attract our interest. Therefore, social psychology studies sometimes tend to be preoccupied with only fragmentary and temporary phenomena. We should be able not only to outline, but also to expand, the domain of research concerning “society”, with a sustainable, long-time perspective on the acquisition of well-being.

In light of previous research trends in social psychology, we need to consider how this science might have contributed to society, and how it has met people's expectations. We should think about what constitutes valuable research and what we ought to look for at this present moment. Social psychology has advanced along with advances in many related sciences. This interdependency should be taken more into consideration by everyone. It is important that social psychology does not draw attention to simple, popular issues; it should keep in mind that we, as humans, possess the power to substantiate human history. We need to propose ways of finding adequate objectives and methods that meet the demands of worthwhile scientific research that has social reality and enhances personal and social well-being.

Keywords: well-being, evolution theory, tourism, regional improvement, collaborated studies, valuable studies.